国際協働学習

iEARNレポート

2021年度

特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構（JEARN）

2022年6月1日発行　ISSN ２４３４−００４９（オンライン）

国際協働学習iEARNレポート（2021）　目次

番	題　名	所　属	報告者代表氏名	頁
	論文編			1
1	国際協働学習におけるグローバル・コンピテンスの育み - オリンピック・パラリンピック教育プロジェクトを通して -	TOPA Project 東洋学園大学 明治学院大学	滝沢 麻由美 長谷川 早百合	2
	プロジェクト実践編			13
2	ANNE FRANK Meet & Learn - ANNE FRANK パネル展・大型ANNE写真本 2021 -	iEARN/JEARN	高木 洋子	14
3	Machinto – Hiroshima/Nagasaki for Peace - 今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か -	iEARN/JEARN	高木 洋子	15
4	GOMI on EARTH - ごみの長い旅 -	iEARN/JEARN	高木 洋子	17
5	グローバル・シティズンシップを育む防災教育プロジェクトの構築と普及　- パンデミック時代の国際協働学習 -	防災世界 子ども会議	納谷 淑恵 岡本 和子	19
6	THE TEDDY BEAR PROJECT REPORT-2021	iEARN/JEARN	Puppala Rasagnya	22
7	iEARN Projects で異世代国際交流 - OrigamiとFolk and Culture Projectを使って -	神戸市立すずらんだい児童館	福井 良子	24
8	青少年ペンフレンドクラブ（PFC） - 海外文通の取組 -	日本郵便 株式会社	ペン郵便・物流事業企画部 切手・葉書室 青少年ペンフレンドクラブ	25
	小学校実践編（一部含む中学校）			27
9	コロナ禍だからこそ際立ってきた国際協働学習 - コロナ禍での交流のリアル -	金沢市立 大野町小学校	角納 裕信	28
10	SDG s 未来都市から海外へ発信 - テディベアプロジェクトを通して学んだもの -	珠洲市立 蛸島小学校	牛崎 絢香	30
11	テディベアプロジェクトを通した交流	長岡市 教育委員会	星野 和子	32
12	国際協同学習を通して感じた生徒の成長	英語教室 JOY CLASS	赤松 由梨	34
	中高学校実践編			36
13	SDG s の目標16と17をテーマとする英語の授業の試案 - Machinto – Hiroshima/Nagasaki for Peaceを通して -	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	37
14	Gmailを活用した異文化交流の試み - スロバキアの中学生との交流から -	仙台市立 上杉山中学校	若生 深雪	39
15	Girl Rising Projectの実践 - 高校3年生選択授業「国際理解」-	Girl Rising Project 啓明学園中学校高等学校	関根 真理	41

16	Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peaceに参加して - アメリカ合衆国・アルゼンチン・日本の学校との交流 -	山口県立 高森高等学校	赤松 敦子	44
	大学実践編（含Youth　Project）			46
17	2021年度FOLK COSTUMES AROUND THE GLOBE PROJECT - 折り紙ワークショップから学ぶJEARN Youth Project -	青山学院大学	勝又 恵理子	47
18	Youth facilitator実践としての学び - 台湾・インド・エジプトに向けたMottainai Workshopを通して -	青山学院大学	岡田 麻唯	49
19	日米亜のiEARN Future Teachers Project KOSKO - iEARNのグローバル・コンピテンスの育みを目指して -	明治学院大学	長谷川 早百合	51
20	大学におけるテディベアプロジェクト支援 - ユースプロジェクトとしての学生の参加形態の工夫 -	金沢星稜大学	清水 和久	53

https://jearn.jp/iearn-report/index.html

ISSN 2434-0049

論文編

国際協働学習におけるグローバル・コンピテンスの育み

オリンピック・パラリンピック教育プロジェクトを通して

東洋学園大学　滝沢　麻由美
明治学院大学　長谷川　早百合

東京 2020 開催を機に、オリンピック・パラリンピック教育プロジェクトとしてスタートした iEARN の The Olympics & Paralympics in Action (TOPA) Project は、パンデミックで活動期間が延長され、オンライン発表会も 2 回おこなうことになったのだが、ちょうどその時期に iEARN が発表したグローバル・コンピテンス (GC) につながる 5 outcomes を反映したプロジェクト終了後調査にも取り組み、その考察を通して iEARN が育む GC への理解をより深めようとした。

iEARN　グローバル・コンピテンス　オリパラ教育　オンライン発表会　プロジェクト後調査

1. はじめに

iEARN は、21 世紀型のグローバル・シティズンシップ形成のために不可欠なグローバル・コンピテンス育成を目標に、メンバー自らが考案し、SDGs と連動する 100 以上の「アイアーン・プロジェクト」を通して、国際協働学習 (Global Project-Based Learning) に取り組んでいる。この実践研究は、その 1 つとして東京 2020 の開催を機に Unity in Diversity－多様性の中の調和－を目指し、オリンピック・パラリンピックの価値教育 (IOC, 2017; IPC, 2017) 等を参考に、2019 年に筆者 2 人が共同プロジェクト・ファシリテーターとして立ち上げた The Olympics and Paralympics in Action (TOPA) Project (Takizawa & Hasegawa,2019) において、iEARN のグローバル・コンピテンスの概念を構成する 5 つの Outcomes (成果項目)を中心としたプロジェクト終了後調査を通しておこなわれたものである。

この 5 outcomes は、iEARN 公式サイトの iEARN Project Framework (iEARN, 2020) の中で、次のように述べられている。

1. Connect with and become part of a global community
2. Develop communication skills to connect with diverse audiences
3. Develop openness and respect towards people from other cultures and perspectives
4. Make meaningful contributions to their local and global communities
5. Develop a culture of caring for each other and the planet

これらは、Asia Society と OECD による定義 (OECD/Asia Society, 2018) を拠り所としている(iEARN-USA,2021; iEARN,2022)が、まず先行研究として、その経緯を含んでグローバル・コンピテンスとはどのようなものであるかについて述べ、次に TOPA Project、特に、オリンピック開催ひと月前に、プロジェクトの集大成として、成果物の鑑賞会と中高生のライブ発表をメインとして、パンデミック下の 2020 年と 2021 年の 6 月に 2 回おこなわれた Zoom によるオンライン発表交流会、TOPA Global Exhibition (TGE) について触れながら、今までにすでに報告されているプロジェクト終了後調査について述べる。そして、本論では、特に その TGE 2021 に参加した教師と中高生を対象におこなったプロジェクト終了後調査に焦点をあて、5 outcomes の観点についての質問回答の結果を中心に、このプロジェクトの成果と課題を考察し、今後の示唆を得るとともに、iEARN の国際協働学習プロジェクトにおけるグローバル・コンピテンスとその 5 outcomes の理解をより深めていく。

２．先行研究

2-1 グローバル・コンピテンス

Salzer & Roczen によると、global competence (GC)という言葉は数十年前から日常的に使われているが、科学的文脈からすると実は比較的新しい概念(construct)であり、最近になって Boix-Mansilla & Jackson (2011)など GC 研究における「影響力ある提案」が出てきたものの未だ全員一致の定義はないという (2018, p.7) 。

Boix-Mansilla & Jackson (2011)の *Educating for Global Competence: Preparing our Youth to Engage the World* とは、Asia Society Partnership for Global Learning の協力のもとアメリカの州教育長協議会(Council of Chief State School Officers: CCSSO)の研究依頼に端を発して立ち上がったグローバル・コンピテンスタスクフォースの研究をもとに Global Competence (GC)の定義を提案している、グローバル的な能力を持ち備えた生徒像などを示す GC 本である。何故今(2011 年当時)GC が生徒にとって必要なのか、GC とは何か、そして GC 概念の枠組みに含まれる 4 つの構成要素について 1 つずつ説明し、実践例と生徒の言動、振舞などで見取れる GC 要素の解説もある。教員への指針から公共政策まで教育現場で GC の取り入れを促すわかりやすい提案書となっている。

後に経済協力開発機構(OECD)の国際学習到達度調査 PISA2018 で国連の持続可能な開発目標(SDGs)の特に#4.7 (Educating for Sustainable Development and Global Citizenship)を念頭に GC を測定することになるが、その際使った GC 概念の 4 つの側面はこの GC 本をベースに、Asia Society と共同開発している（Asia Society/OECD, 2018）。同年出版された PISA のハンドブック（OECD, 2018）を iEARN はメンバー用ワークショップで紹介し 5 outcomes の出どころだと説明している（iEARN, 2022）。

PISA 用に開発された GC の 4 側面（能力）の定義と人物像のまとめは以下の通りだ (OECD, 2018)。なお、4 能力の訳は阿部（2021）、各説明文は長谷川試訳。

1. 「ローカル・グローバル・相互文化的な問題について調べる」
知識と批判的思考を使いグローバルな課題についての意見が形成できる。学校で学んだ知識や思考方法を組み合わせて、地域・世界・文化的問題に関して自分の立場を確立できる。新旧メディアのユーザーでもクリエイターでもある。

2. 「他者のものの見方や世界観を理解し尊重する」
グローバルな問題や他人の視点や行動を複眼的に捉えることができる。多文化の歴史、価値観、コミュニケーションスタイルなどを学ぶことにより自分も複合的要素に影響されていることなどを認識する。相手への尊敬や興味を持つ過程で普遍的共通点にも気付く。立場や信念の違いを認めることは必ずしも受け入れることではないものの相互関係でより成熟した判断を下せる。

3. 「文化を超えて、寛容な心で、適切に、かつ効果的に、人と関われる」
文化的背景が違うとコミュニケーションの仕方が違うことを理解し相手によって行動やコミュニケーションを合わせることができる。寛容な心で相手への配慮や興味を持ち、適切にお互いの文化を尊重し、効果的に相互理解が得られるコミュニケーションをとる。

4. 「集団としての幸福、持続可能な成長のために行動を起こす」
ローカル、グローバル、相互文化的状況に効果的に責任を持って対応できる。個人的、地域的、デジタル、グローバルな複数の影響力を持つ。権利や尊厳を大切にし、住む地域の生活環境を改善し、より公正で平和な包括的で環境的に持続可能な世界を築くために活動する。

この GC の 4 能力と iEARN 5 outcomes の比較を坂本（2022）の講義解説をもとにまとめてみると（以下表 1）要素のつながりが見えてくる。

表 1 Outcomes と GC の比較表 （坂本、2022）

iEARN 5 outcomes	GC 4 能力(OECD, 2018)
1.グローバルコミュニティとつながり、その一員となる	４要素を統合
2.多様な聴衆とつながるためのコミュニケーションスキルを身につける	3.文化を超えて、寛容な心で、適切に、かつ効果的に、人と関われる
3.異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つ	2.他者のものの見方や世界観を理解し尊重する
4.地域やグローバルコミュニティに有意義な貢献をする	4.集団としての幸福、持続可能な成長のために行動を起こす能力
5.互いと地球を思いやる文化を育む	iEARN Assembly で独自に加えた Global Goal として重要な項目

iEARN は 5 outcomes の拠り所を OECD の GC としているため、GC と似たような用語や概念はいくつかあるが、余り惑わされず重要な点としてどの枠組みも目指すところは、変化し続け、多様化し、相互的に繋がった世の中で活躍できるための能力を現わしている共通のものとして捉えるべきだと述べている（iEARN, 2022）。OECD の GC 定義もまだ検証の余地があるとされ（Salzer & Roczen, 2018, Robertson, 2021）GC 研究は続くであろう。iEARN が独自に開発した 5 outcomes は、プロジェクトに参加する者にとって教育現場で下す様々な判断をする上でも重要な役割を果たす枠組みである。

2-2 オリンピック・パラリンピック教育プロジェクトにおける 5 outcomes

ここでは TOPA Project (TGE 2020、及び 2021)について、今までにすでに報告されている iEARN の 5 outcomes の観点を含んだ調査結果とその考察について述べる。

1) TOPA 2020 質問紙調査（教師対象、筆者らが

オリジナルの質問紙を作成）

前述の TGE 2020 終了後に、iEARN の 5 outcomes(iEARN,2020)についての質問を含んだ TOPA 2020 のオリジナル質問紙を筆者らが作成し、参加した教師に任意で依頼したところ、5 ヵ国（アゼルバイジャン、ネパール、ポルトガル、ロシア、日本）から 8 人、内訳は Primary (6), Middle(2), Secondary(3), Post-Secondary(2)（重複あり）の回答を得た（滝沢、2020；栗田・滝沢、2021）。5 outcomes についての質問、「このプロジェクトに参加した結果、どのような成果があなたの生徒に見られましたか（複数回答可）」に対して、Outcome 1 (7), Outcome 2 (6), Outcome 3 (7), Outcome 4 (4), Outcome 5 (4), Other (1)という結果になり、僅差ではあるが、Outcome 1「グローバルコミュニティとつながり、その一員となる」と、Outcome 3「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つ」が多かった。その次の「TOPA のどのアクティビティにおいて、その成果が見られましたか（複数回答可）」では、これも僅差ではあるが、一番多かったのは「応援ポスターや応援ビデオの作成」と‘Together Hand in Hand!’Campaign (My Happy Face & Words)だった。これは子どもたち一人一人が自分の笑顔とうれしいことばで手をつないでいく絵を作成する、TOPA 参加メンバーである町田淳子氏のオリジナルのアクティビティ（町田、2021；町田・滝沢、2018;2019）で、コロナ禍によるパンデミック下であっても、世界中の生徒たちが気持ちもつながっていくことを目指し、約 400 人の生徒の絵が集まった。これらは両方とも、まずクラスやグループで生徒たちが作った作品を最終的に他の参加校の作品と合わせたりつなげたりすることで、より一体感のある大きな協働成果物として感じられるものであった。

TOPA Global Exhibition & Youth Session (TGE) 2020 がこの次だった理由は、当日のオンライン発表会には小学生は参加対象となっておらず、幼・小学校の教師らがこれを選んでいなかったためであるが、当日に発表参加した中高生の教師は全員がこれを選んでいた。また、ここでの 5 outcomes の選択理由ともいえる最後の Teachers' comments（自由記述）をテキストマイニング（ワードクラウド）した結果（図 1）、「生徒がグローバルプロジェクトに参加し、つながったこと」に関する肯定的な言及が多く、他の頻出形容詞から、「それが（コロナ禍で）チャレンジングであったと同時に、興味深く貴重であった」という印象も含まれていることがわかった(滝沢、2020)。

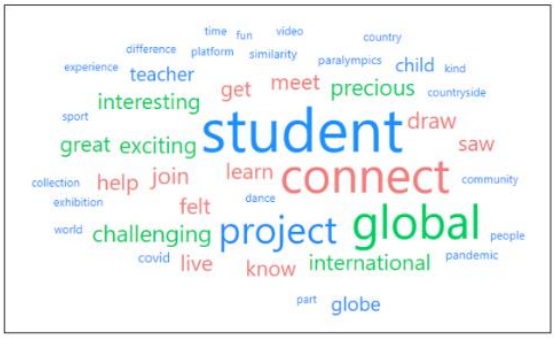


図 1 TGE 2020 Teachers' comments（ワードクラウド）

2) TOPA（及び TGE）2021 終了後調査（大学生対象、滝沢と担当教員が iEARN Secondary Post-Project Survey 2021 版に質問を追加して作成）

TOPA 2021 には、ジェイアーン・ユースプロジェクトの一環として、東洋学園大学の児童英語教育ゼミの学生（12 名）とその担当教員で TOPA 参加メンバーの坂本ひとみ氏が参加しており、福島の小学校へのオンラインでのオリパラ授業のサポートと TGE 2021 でのその発表、また中高生の発表時の司会等の活動をおこなった。TGE 2021 終了後調査（任意回答数 9 名）では、筆者らファシリテーターが主導した TGE 2021 だけでなく、その担当教員によるゼミの授業内容も含んで内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning: CLIL）として考え、それらを構成する 4 つの C（Content:内容、Communication：言語、Cognition: 思考、Community/Culture:協学/文化理解）の観点から、回答結果が考察されている(坂本・滝沢、2022)。

この中で、まず顕著に表れていたことは、前述の小学校へのサポートに加え、TGE 2021 にも当日参加した学生（回答数 5 名）と参加できなかった学生（回答数 4 名）との間に大きな差異があったことである。Outcome 2 のコミュニケーションスキルに関わる「海外の参加者に自分の意見を説明する場面でうまくできた」と「海外の参加者に向けて、自分の考えを積極的に発信した」(Communication)においてと、Outcome 3 に関わる「海外の参加者に対して今まで持っていたイメージが、実際に会うことで変わった」(Culture)において、TGE 2021 に参加した学生は全員が肯定的であったのに対し、参加していない学生は否定的になっており、海外の参加者たちとのリアルタイムでのオンライン交流発表会の経験が、学生の自己評価の差に大きく影響していたことが述べられている。

また、このプロジェクト参加の全体的な成果としては、「グローバルイベント、特に今回はオリンピック・パラリンピックに対しての自分の知識や関心が高まった」(Content)、「オリンピック・パラリンピックの価値について一生懸命考えた」(Cognition)について、1 人を除く全

員が肯定的であった。一方、課題としては、Outcome 4 に関わる「このプロジェクトに携わる間に、グローバルな問題に対して、何かアクションを起こしたか」に対し、8 名が否定的で、TOPA や TGE 2021 に参加して小中高生をサポートしたこと（Community/Culture）が、この活動の目的の１つであった「アクションを起こした」という自覚につながっていなかったことが指摘されている。しかし、同じく Outcome 4 の「このプロジェクト終了後、グローバルな問題に対してアクションを起こしていく可能性が高まったか」には全員が肯定的であったため、この時点ではグローバル・コンピテンスの芽生えの可能性として見取り、今後のユースプロジェクトへの参加とその取り組みの改善を通して、より自覚的、自発的な行動につながっていくよう期待されている。

３．TOPA Project と TGE 2021

東京 2020 の 1 年の延期によって、このプロジェクトは TGE 2020 の流れを継続し、翌年ふたたび TGE 2021 を開催し、11 の国・地域から約 50 名の参加を得た（写真 1）。おもな内容は、次の通りである。

写真 1 TGE2021 ©NPO 法人ジェイアーン HP より

＜TGE 2021 プログラム＞ 2021 年 6 月 26 日(土)（Zoom によるオンライン発表交流会　2 時間半）

1．Hello from around the World!：参加校の紹介とその言語でのあいさつを全員でやり取り
2．Olympic & Paralympic Values Activity & Group Session ：「オリンピック・パラリンピックの価値(Olympic & Paralympic Values)」について関連ビデオで紹介した後、ブレイクアウトルームに分かれ、各自が自分にとって一番大切に感じる価値とその理由を考え、Jamboard でグループごとにそれらを載せたページを作成して発表、最後に成果物として全体で共有
3．Collective Video Exhibition from TOPA Forum：TGE 2021 までに iEARN のフォーラムに投稿のあった小学校（オーストラリア、ロシア、台湾、パキスタン、日本）を含んだ 13 の国と地域からの計 17 の参加校紹介と、その活動投稿のまとめビデオを一緒に鑑賞
4．Youth Session： 中国、ネパール、ポルトガル、ブラジル、モロッコ、日本からの 8 校が、自国のコロナ禍での学校生活の様子や、人気スポーツ、東京 2020 の競技や出場予定のアスリートについて発表
5．Let’s Cheer for the World!：各発表後に各国語の応援エールの紹介と全体でのやり取りをおこない、今回のオンライン発表交流会の協働成果物として「世界応援ビデオ」を作成

４．調査の目的

このような TOPA Project（及び TGE 2021)への参加を通して、その中心メンバーであった教師と中高生たちが、iEARN の考えるグローバル・コンピテンスにつながる 5 outcomes の観点を中心に、どのように振り返り、生徒評価や自己評価をしたかを考察することによって、このプロジェクトの傾向や成果、課題を明らかにする。また、この実践研究を通して、プロジェクト・ファシリテーターである筆者らがグローバル・コンピテンスについての理解を深め、今後の国際協働学習プロジェクトの運営や活動、評価方法の改善のための示唆を得る。

５．対象

2021 年の TOPA Project（TGE 2021）に K-12 の生徒と共に参加した 9 の国・地域（オーストラリア、台湾、中国、ネパール、ブラジル、ポルトガル、日本、モロッコ、ロシア）からの 15 名の教師と、TGE 2021 で発表した 7 校 20 名の中高生。任意回答数は、教師 10 名と生徒 18 名。尚、この調査結果を匿名でレポートすることは、この教師たちに事前に了解を得ている。

６．方法

6-1　TOPA 2021 終了後調査

１）教師対象（2 種類）：

① TOPA 2021 質問紙調査（筆者らが前述の 2020 版をもとにオリジナルで作成）
https://forms.office.com/r/AwHrpvps02

②iEARN Educator Post-Project Survey 2021（旧版）

2) 中高生対象：iEARN Secondary Post-Project Survey 2021（廃版）に、筆者らが理由項目や TOPA についての具体的な質問を追加して作成）
https://forms.office.com/r/KEEiy7zMqb

6-2　回答期間と方法

期間：TGE 2021 終了後の 8 月 14 日～31 日

方法：TOPA についての具体的な質問を含んだ質問紙（教師対象①と中高生対象）は、マイクロ

ソフト Forms で作成し、教師対象②iEARN Educator Post-Project Survey 2021（旧版）のリンクと共に参加教師に配信し、任意で回答を依頼した。Forms による 2 つは自動回収、教師対象②は、このプロジェクトのみの集約結果をファシリテーターである筆者らに送ってもらうよう iEARN に依頼した。

6-3 分析方法

1）教師対象

①においては、先行研究 2-2 1）で述べた 2020 年の調査のように、5 outcomes の観点についての質問は選択式（複数回答可）、及び自由記述の回答は「ユーザーローカルテキストマイニング」による分析、さらに、②での関連質問についての結果からも同様に、特に顕著な傾向や成果、課題について考察する。

2）中高生対象

先行研究 2-2 2）と同様に、5 outcomes の観点に関連する質問、及び TOPA（TGE 2021）の内容に関する質問においては、問題によって選択式（複数回答可、または 5 件法）と自由記述（上記のテキストマイニング）の回答から、1)と同様に焦点をあてて考察する。

7. 結果

7－1 教師対象

① TOPA 2021 質問紙調査

1)生徒の 5 outcomes について

Q6：「このプロジェクトに参加した結果として、どのような成果があなたの生徒に見られましたか。（複数回答可）」に対し、Outcome 1 (9)、Outcome 2 (7)、Outcome 3 (8)、Outcome 4 (3)、Outcome 5 (3)、Other (0)という結果になった。これは前述の 2020 年の調査（滝沢、2020、栗田・滝沢、2021）とほぼ同じ傾向となり、Outcome 1 「グローバルコミュニティとつながり、その一員となる」と、Outcome 3 「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つ」、Outcome 2「多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につける」が多い傾向で、Outcome 4「地域やグローバルコミュニティに有意義な貢献をする」と Outcome 5 「互いと地球を思いやる文化を育む」は、前回と同じく相対的に低くなった。

Q7：「その理由」の自由記述回答全体をワードクラウドと単語出現頻度の 2 種類でテキストマイニングした結果、名詞は student、動詞は learn のスコアが他に抜きんでて高く、形容詞は、スコアは低いが、cultural, Chinese, different が上位にくることがわかった（図 2 と表 2）。

実際の回答例

・The students had the opportunity to know people from different cultures and connect with them.

・The project was an opportunity to share and to learn about social and cultural aspects and values and to communicate with peers from different countries.

図 2 Q.7 5 outcomes の選択理由

表 2 同上（単語出現頻度とスコア）

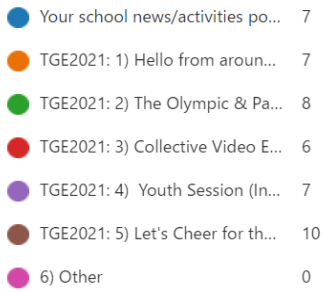
名詞	スコア	出現頻度
student	76.46	9
value	20.60	3
country	20.33	3

動詞	スコア	出現頻度
learn	47.21	6
know	19.90	3
communicate	13.16	2
share	12.60	2

形容詞	スコア	出現頻度
cultural	12.77	2
chinese	12.69	2
different	12.36	2

Q8：「その成果が見られたアクティビティ」については、5) Let’s Cheer for the World!と、僅差ではあるが、2) Olympic & Paralympic Values Activity & Group Session が多くなった（表 3）。

表 3 Q.8 生徒の Outcome が見られたアクティビティ



実際の回答例

・We could actually see the activities of people from various countries and get to know their thoughts.

また、特に「オリンピック・パラリンピックの価値」アクティビティについて（Outcome 2 とし

て）
Q10：「TGE 2021 で、生徒がオリパラの価値について知り、自分の意見を英語で述べるよい機会を持った」と Q11「生徒は自分の好きな価値観を考え、自分の意見を積極的に世界の仲間と共有した」は、両方とも全員が肯定的に回答した。

2)教師自身について
Q14：「グローバル教育（特にこの長いパンデミック下で）に関して、あなたの“Teacher's belief”（教師の信念）は何ですか」（図 3）で、global、student, learn を中心に、collaborative、different、important、meaningful（形容詞）、world、learning（名詞）、bring, provide, give, communicate(動詞)が大きく出現した。

図 3 Q14“Teacher's belief”についての自由記述

実際の回答例
・Through the class, students, including myself, can feel that we are global citizens and ″friends with all the people living on the earth.
・As a teacher of English, I know I can help my students improve their communication skills, and the best way to do that is to give them the chance to communicate with real people from different parts of the world. That is to provide them meaningful learning.

② iEARN Educator Post-Project Survey 2021
1）生徒の 5 outcomes 関連について
Q23：「このプログラムに参加して、何人の生徒が次の点で改善しましたか？」
Outcome 3 の Global awareness と Openness and respect の 2 つが 5 点中 3.91 で最も高くなった。また、ここでは選択肢として明確に表現されていた Critical thinking skill は 3.18 と最も低くなった。
Q18：「このプロジェクト後に、教師であるあなたが、生徒に対しておこなう可能性がより高いことは？」について、Very likely(水色)の結果が一番多かったのは、Outcome 2 に関連する左から 3 つ目の Communicating with youth from different cultures/beliefs（73%）であった（図 4）。

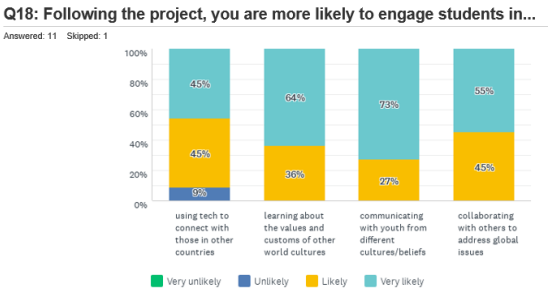
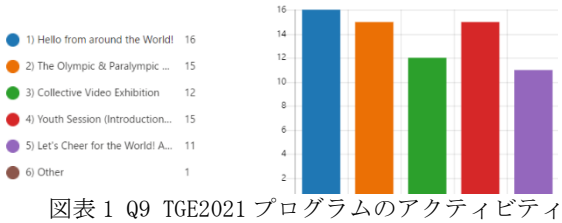


図 4 Q18 Very likely（水色）と Likely(黄色)

2）プロジェクト中に困難だった点について
Q26：「参加のための時間調整」(55%)と「メッセージへの返信」(36%)が多かった一方で、「困難な点はなかった」(18%)も含まれていた。

7－2　中高生対象
1）TOPA（TGE 2021）全体について
Q8:「どのように楽しみましたか？」の自由記述回答で like, learn, talk（動詞）, experience（名詞）、great, good(形容詞) が上位にきていた。
Q9：「TGE 2021 では何を一番楽しみましたか」（図表 1）について、1）2）4)が多くなっていた。（内容は、前述の ＜TGE 2021 プログラム＞を参照)。



図表 1 Q9 TGE2021 プログラムのアクティビティ

Q8:「その理由」として、最もスコアが高い語、country と people に、sport、activity、opportunity（名詞）が続き、interesting, amazing, great（形容詞）と think、get、know（動詞）を囲む形となった（図 5 と表 4）。

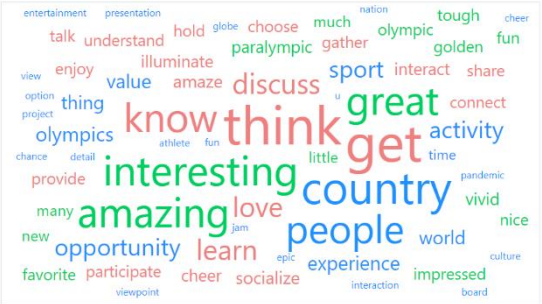


図 5 Q8 理由についての自由記述

表 4 同上（単語出現頻度とスコア）

名詞	スコア	出現頻度
country	65.47	8
people	54.73	7
sport	29.62	4
activity	29.43	4
opportunity	29.42	4

動詞	スコア	出現頻度
think	28.22	4
get	28.04	4
know	19.90	3
discuss	12.88	2
learn	12.59	2

形容詞	スコア	出現頻度
interesting	20.81	3
amazing	20.76	3
great	20.08	3

実際の回答例

・Actually, I enjoyed all the activities because they were a new experience for me.

・As I love socializing with people from all around the world, it was a great opportunity to connect with people even during these tough times. We got along while we cheered for the world. Also, I got to keep my viewpoints using Jamboard, which was really awesome.

Q15：「このプロジェクトで何を学びましたか？」について、learn(動詞)を中心に、country, value, athlete（名詞）と、paralympic, different, many, friendly（形容詞）が出現。Olympics(名詞)と Olympic（形容詞）は合わせて高かった（図 6 と表 5）。

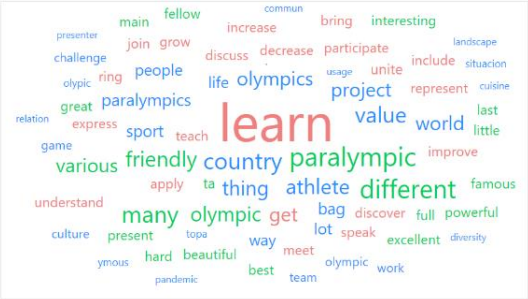


図 6 Q15 このプロジェクトでの学びについて

表 5 Q15（(単語出現頻度とスコア）

名詞	スコア	出現頻度
country	85.05	10
value	66.18	8
athlete	49.32	6
thing	37.33	5
olympics	30.22	4

動詞	スコア	出現頻度
learn	159.22	17
get	12.04	2

形容詞	スコア	出現頻度
paralympic	40.98	5
different	37.44	5
many	28.36	4
friendly	21.06	3
olympic	13.02	2

実際の回答例

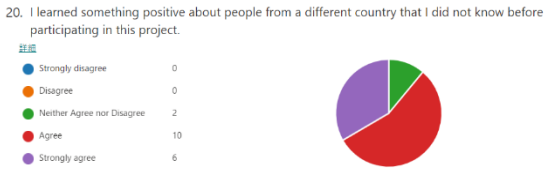
・I learnt about Olympics and Paralympics its values and also about sports in various countries and the athletes that represent the country and participate in the Olympics or Paralympics. Also, I learnt the way to present, speak and express from my fellow presenters.

2）生徒自身の 5 outcomes について

各 outcome 関連と思われる質問から、特に肯定的な回答（赤、紫）が多かったもの、また逆に、今後の課題になると思われるものを抜粋。

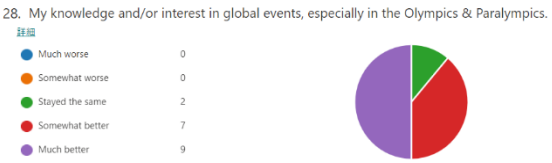
〇肯定的な回答が多かった質問

Q.20: Outcome 3 「以前知らなかった他国の人々についての肯定的な印象」（図表 2）



図表 2 Q.20 （同上）

Q28：Outcome 1 「グローバルイベント（特にオリパラ）についての知識と興味」（図表 3、図 8）



図表 3 Q28 （同上）

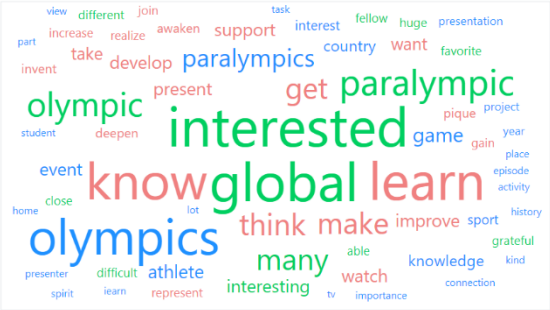
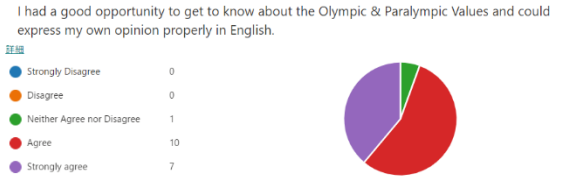


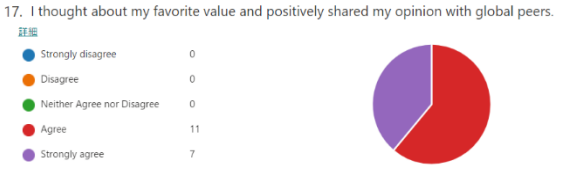
図 8 Q28 理由の自由記述（ワードクラウド）

また、特に「オリンピック・パラリンピックの価値」アクティビティについて（Outcome 2 として、教師対象① Q10,11 と同じ質問）
Q16:「オリパラの価値について知る機会を持ち、適切な英語で自分の意見を共有できた」（図表 4）



図表 4 Q16 （同上）

Q17：Outcome 2「自分の価値について考え、積極的に他国の生徒と共有できた」（図表 5）



図表 5 Q17 （同上）

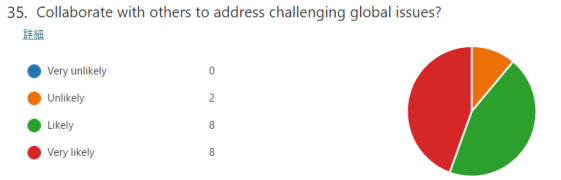
「このプロジェクト後に次のことをおこなう可能性について」
Q 34. Outcome 3 「さまざまな文化や信条を持つ若者たちとのコミュニケーション」（図表 6）

図表 6 Q34（同上）

●今後の課題があると思われる質問回答
Q13：Outcome 4「このプロジェクトで、グローバルな問題について行動を起こしましたか？」では、Yes (5)、No.(13)であった。一方で、Q23「このプロジェクトに参加したことで、学んだことを地域社会のために生かすことができた」では肯定的が多くなった。

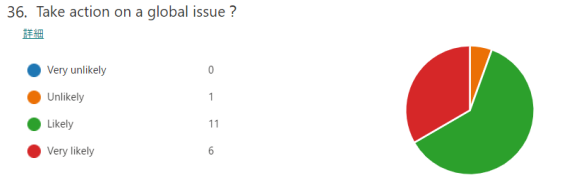
実際の回答例
・I think so because we learned the Olympic and Paralympic values that are very important to make a better and respectful community.
・Because I have shared the knowledge about my country with the new friends from other countries.

Q35：今後は「グローバルな課題に取り組むために他者と協力しますか？」の可能性は高くなっていた（図表 7）。



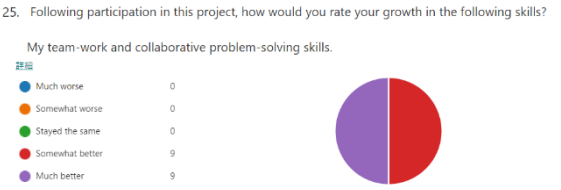
図表 7 Q35（同上）

Q36:「グローバルな課題についてアクションを起こしますか？」（図表 8）



図表 8 Q36（同上）

Q25: Outcome 5 「自分のチームワーク力と協調的な問題解決能力」（図表 9）



図表 9 Q25（同上）

7．考察

このような結果に考察を加えながら、以下に成果と課題を述べる。

7-1 成果

1）生徒の 5 outcomes について

今回の教師、及び生徒対象の TOPA 2021 終了後調査でも、前年の教師対象の TOPA 2020 終了後調査（滝沢、2020、栗田・滝沢、2021）や、大学生対象の TOPA 2021 終了後調査（坂本・滝沢、2022）と同様に、Outcome 1 「グローバルなコミュニティとつながり、その一員となる」、Outcome 3 「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つ」、そして Outcome 2 「多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につける」について肯定的な回答が多い結果となった。理由としては、2021 年の TOPA は深刻なパンデミック下で、学校での活動より TGE 2021 そのものがプロジェクト活動のメインになり、当日は 11 の国・地域から 50 名が参加の国際色豊かなリアルタイムのオンライン発表交流会であったため、前述の 3 つの Outcomes がより感じられたのではないだろうか。

自由記述全般で単語出現頻度のスコアが高い student 、 country 、 people 、 experience 、 opportunity （名詞）、learn、think、know（動詞）、global、interesting、amazing、great

（形容詞）などの語や実際の回答例からも、それを推測することができると考える。
2) 特に「オリンピック・パラリンピックの価値」アクティビティについて
これは、このオリパラ教育プロジェクトの核と言うべきトピックで、TGE 2021 では筆者らファシリテーターがリアルタイムで主導できる最も重要なアクティビティであったが、Outcome 2 に関連した前述の２つの質問への回答結果から、教師が生徒について、また生徒自身も、自分の意見を適切な英語で伝え、他の参加者と共有する中で「価値」についての学びがあった、という肯定的なものになった。
また、生徒の Q10 のアクティビティ全体のコメントにも values, Olympic, Paralympic, athlete という関連語が多く出ており、さらに、Q23 では、この values についての学びを自分の身近な友人や、地域社会のために生かすことができる、という答えもいくつか見受けられた。
2021 年も引き続き、東京 2020 の開催自体すら賛否両論あった中、困難を極めたこのプロジェクトであったが、このアクティビティを 11 の国・地域の生徒や教師たちと共にリアルタイムでおこない、肯定的な回答を多く得られたことは、筆者らファシリテーターにとっても、たいへん大きな意味を持つことであった。
3) 教師自身について
・教師 ① Q14 Teacher’s belief の記述内容と ② Q18 の「このプロジェクト後に教師生徒に対しておこなう可能性がより高いこと」（Communicating with youth from different cultures/beliefs）の重なりから、やはり教師たちがまず Outcome 1, 2, 3 の機会を生徒たちに作ろうとしている姿勢が強く感じられた。

7-2 課題

1) 参加のための時間確保やスケジュール調整
教師対象 ② Q26 のプロジェクト中に困難だった点、「参加のための時間調整」と「メッセージへの返信」について、特に 2021 年のパンデミック下で、さらに学校現場でプロジェクト参加時間確保は難しくなっていたが、逆にこのプロジェクトの場合は、前述のように中高生は、TGE2021 というオンライン発表交流大会にフォーカスしたことで、それに向けて時間を捻出して準備、参加してくれたということがあった。
しかし、この時間確保の問題は多かれ少なかれいつもプロジェクト活動にはついて回ることで、ファシリテーターとしては、今後の進め方において、少しでも参加してもらいやすいように、またそれが Outcome 4 へ直接つながっていくようなアクティビティデザインや働きかけに留意していく必要がある。
2) Critical thinking skills
教師② Q23 で選択肢として出ていた critical thinking skills が、パーセントとして最も低くなったが、5 outcomes の各説明文には、このことばは直接出てきていないため、今回は SDGs に連動する iEARN の国際協働学習全体に必要とされるスキルとして、筆者が Outcome 5 として捉えた。しかし iEARN の新しい Post-Project Survey for Secondary(2021)においても文言化はされないまま、for Educators 2021(旧版)同様に、生徒の 5 outcomes についての評価の質問群と一緒に出てきている。このように最後に評価をおこなうのであれば、各プロジェクトのファシリテーターや参加の教師はより意識的、具体的に、生徒たちのこのスキルをどこでどのように培うのかを事前に考え、活動を進めていく必要があるだろう。

８．結論

このように、今回の TOPA Project (TGE 2021) 終了後調査においては、5 outcomes のうち、最初の 3 つが成果としてよくあらわれる傾向があり、他の 2 つには、今後取り組むべき課題が含まれるのではと考えている。
プロジェクトとしては、オリンピックイヤーの 2020 年、東京 2020 大会開催約半年前からパンデミック下の厳しい状況の中で進められ、2021 年に東京 2020 が何とか無事に閉会した 5 か月後に、今度は 2022 年 1 月に北京 2022 のために TGE 2022（10 の国・地域から約 40 人の参加）を開催し、その直後に「オリンピック休戦」問題で揺れた 2022 年 3 月の閉会まで続けられた。
今回は残念ながら、新しい Post-Project Surveys (iEARN,2021)の結果は間に合わなかったが、この新版は、5 outcome が明記され、各 outcome ごとに質問が 3 つずつ紐づけされており、よりわかりやすくなっている。今後、国別や他のプロジェクトからの結果報告等によって、また理解を深めていきたい。
このような過程を経験し、SDG s につながる iEARN の国際協働学習を通して生徒のグローバル・コンピテンスを育んでいこうとすることは、教師自身も同様に世界の問題に直面し、その中で自分自身も試行錯誤し鍛えられながら、生徒にとっての最善の学びの状況をめざし、教師同士がより協働し進めていくことなのだと身をもって学んだ。今後もこの TOPA Project は、オリンピックの歴史上、以前からそうだったように、そのときどきの世界情勢の影響を直接的に大きく受けていくことは想像に難くない。その中でファシリテーターとしては、オリパラ教育とその意義をさらに学び、今回のような厳しい状況下でも世界中から集まったアスリートたちが万

国旗のもとでフェアプレーをする姿に、子どもたちが胸を躍らせながらその「価値」を実感し、その学びを通してグローバル・コンピテンスが育まれていくようなプロジェクトを目指し、次のParis 2024に向け活動を続けていきたい。

９.参考文献

阿部始子(2021)東京学芸大学公開講座「地球市民を育てる小学校外国語教育の授業」講義資料

栗田智子・滝沢麻由美(2021)「ジェイアーンの国際協働学習の成果と課題の考察　グローバル・プロジェクトについての実践状況調査から」特定非営利活動法人 グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン国際協働学習iEARNレポート 2020年度 2-8. https://jearn.jp/iearn-report/ISSN2434-0049_iEARN_Report_20210605.pdf

坂本ひとみ・滝沢麻由美 (2022)「CLILによるグローバル・コンピテンス育成の試みーアイアーンの国際協働学習を通してー」『東洋学園大学紀要』30.254-270.

坂本ひとみ(2022)ジェイアーン第 4 回アイアーン学習会「アイアーンが育むグローバルコンピテンス」講義用資料 https://www.youtube.com/watch?v=VCAlUDqjzBU

滝沢麻由美(2020)「Tokyo2020 をテーマにした国際協働学習プロジェクト」JACET 言語教育エキスポ2020口頭発表資料

滝沢麻由美(2021) TOPA (The Olympics & Paralympics in Action) Project - Well-being & Solidarity in Response to Covid-19. 特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構ジェイアーン国際協働学習JEARN オンランジャーナル iEARN レポート 2020年度 27-29. https://jearn.jp/iearn-report/ISSN2434-0049_iEARN_Report_20210 605.pdf

滝沢麻由美(2022)「国際協働学習プロジェクトにおけるCLIL的アプローチ ～オンライン発表校交流会を通して」日本 CLIL 教育学会 Newsletter Vol.8 https://www.j-clil.com/_files/ugd/d705d2_ee72ce65b58143c99bcf2118a3ebb0dc.pdf

町田淳子(2021) 「子どもたちの心に平和の種まきをーHappy Face and Words で手をつないでー」『新英語教育』#623 高文研

町田淳子・滝沢麻由美 (2018)「2017年度 一般財団法人 日本児童教育振興財団助成研究 国際理解教育としてのオリンピック・パラリンピックをテーマにした小学校英語教育教材の開発 研究報告書」一般財団法人 日本児童教育振興財団

町田淳子・滝沢麻由美 (2019)『英語で学ぼうオリンピック・パラリンピックーCLIL による国際理解教育として』子どもの未来社

ユーザーローカル テキストマイニングツール https://textmining.userlocal.jp/

Boix Mansilla, V. & Jackson, A. (2011). *Educating for Global Competence: Preparing our Youth to Engage the World*. New York: Asia Society. https://asiasociety.org/files/book-globalcompetence.pdf

iEARN (2003). iEARN Constitution https://iearn.org/pages/iearn-constitution

iEARN (2020). iEARN Project Framework. https://docs.google.com/document/d/1CaihzNs4S2v8cNZSQnFBaw0bDkyWPN0h0plQ7el0B54/edit

iEARN (2021). iEARN Post-Project Surveys. https://www.iearn.org/news/november-2021-newsflash

iEARN (2022). Self-paced iEARN 101: Preparing for a Global Exchange and Meaningful Online Communication. https://us.iearn.org/programs/iearn-101

iEARN-USA (2021). iEARN's 5 Student Outcomes for Global Competence. https://www.facebook.com/iearnusa/photos/a.194325030603333/4039488559420275/

OECD (2018). *Preparing our Youth for an Inclusive and Sustainable World. The OECD PISA Global Competence Framework*. Paris: OECD. https://www.oecd.org/education/Global-competency-for-an-inclusive-world.pdf

OECD/Asia Society (2018). *Teaching for Global Competence in a Rapidly Changing World*. New York: Asia Society. https://asiasociety.org/sites/default/files/inline-files/teaching-for-global-competence-in-a-rapidly-changing-world-edu.pdf

Robertson, S. L. (2021). Provincializing the OECD-PISA global competences project. *Globalisation, Societies and Education, 19* (2), pp.167-182

Salzer, C. & Roczen, N. (2018). Assessing global competence in PISA 2018: Challenges and approached to capturing a complex construct. *International Journal of Development Education and Global Learning, 10* (1), 5-20.

Takizawa, M. & Hasegawa, S. (2019). The Olympics and Paralympics in Action (TOPA) Project. https://iearn.org/cc/space-2/group-676
The International Olympic Committee (2017). Olympic Values Education Programme. https://www.olympic.org/olympic-values-and-education-program
The International Paralympic Committee (2017). I'mPOSSIBLE. Official Education Programme of the Paralympic Movement. https://im-possible.paralympic.org/.

プロジェクト実践編

ANNE FRANK Meet & Learn
ANNE FRANK パネル展・大型ANNE写真本 2021

Project Facilitator　高木洋子

「この忌まわしい戦争もいつかは終わるでしょう。いつかはきっとわたくしたちがただのユダヤ人ではなく、一個の人間となれる日がくるはずです。」1944 年 4 月 9 日　アンネが書いたこの一言一言が現在を生きる私たちに響いているのだろうか。

パネル展　ものがたりのあるミュージアム　オランダ大使館

1. はじめに

2009年末にANNE　FRANK　House（Amsterdam）から託された 34 枚の ANNE 大型パネル展第一回が上智大学で開催された。その後、2011年3 月その16回開催よりJEARNが委託を受け、パネル展の全国展開となり、2021年度最終回は110回目の開催となった。

２．目的と方法

2-1 目的

ベルゲン・ベルゼン強制収容所で 15 歳で亡くなった ANNE に会って、ユダヤ人であるという理由で 600 万という人々に悲惨な死をもたらした事実を次の世代に継続して語り続ける。

2-2 方法

1）パネル展開催

JEARN 会員を通して、学校・大学・地元図書館・記念館などの開催地を募集し、開催に当たっては、次の開催地へのパネル一式輸送経費負担を含めた具体的な打合せをする。開催後には日英報告書の提出を求め、ANNE FRANK House
並びにオランダ大使館と共有する。

2）大型 ANNE 写真本の配布

2015 年アンネ・フランク・ハウスから送られてきた 200 冊のアンネの大型写真本「ものがたりのあるミュージアム」をパネル開催地ほか希望先へ、送料着地払いで贈る。図書館などでの永久保存版である。

3）オランダ大使館

東京オランダ大使館との連携を大切にし、情報交換・共有によりパネル展開催を進行する。

３．活動内容

3-1　パネル展開催

コロナ禍で2020年11月20日 - 2021年11月26日の一年間、パネル一式は淡路夢舞台倉庫で保管され、その後、次の3開催地で開催が実現した。

・第108回　三育学院中学校（千葉県）
https://gcpej.jimdofree.com/link/annefrank/2021/

・第109回　葛飾商業高校（東京都）

・第110回　小平市第五中学校（東京都）
3月5日オランダ大使のonline講話

3-2 ANNE大型写真本の配布

2020年度残数119冊

多くの日本人がANNEに会えるよう、国内ネットワークを使って配布に努め、106冊が配布された。受け取った学校・家庭・機関は、ANNEに会っている写真数枚と感想を高木宛てに送り、
それらは、ANNE FRANK House代理のStefanとオランダ大使館で共有されている。

3-3 オランダ大使館

11月26日JEARN関係者と共に訪問し、これまでの活動への感謝を受け、今後の活動について話し合った。

４.成果と課題

先の見通しが立たず不安な時、いつもANNEの笑顔に励まされる。iEARNプロジェクトで子供たちの作品がファシリテーターのパワーとなるのと同じである。ANNEとの出会いに感謝！

Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace

今、この時代に広島・長崎が語り継ぐことは何か

Project Facilitator　高木洋子

2006年度iEARNプロジェクトとして誕生したMahcinto - Hiroshima/Nagasaki for Peaceは、ロシアによるウクライナへの侵略・殺戮が現実の悪夢となっている今、76年前の広島・長崎への深い理解と教訓が生かされているか問われています。ここに2021年度活動を報告し、次年度への更なるMachinto活動へとつなぎたい。

松谷みよ子　Hibakusha　Art Gallery　Peace Talks

1. はじめに

1945年終戦の夏、8月6日広島、8月9日長崎での原子爆弾投下は、その地に生まれ生活をしていた30万という子供・市民に、史上初めての原子による残忍な死をもたらしました。その犠牲者の恐怖・苦痛・死を贖うために、私たちに出来ることは何か。それは二度とこの過ちを繰り返さないために、次世代を担う世界の生徒たちに広島・長崎をしっかりと伝えること。特にロシアによるウクライナへの侵略・殺戮が侵攻している今
今、Machinto into活動は急務です。

2. 目的と方法

2-1目的

どの国のどの学校で広島・長崎が取り上げられ、生徒たちが事実を学び、更にどう考え、どう決意するのかが、iEARN Machinto Forum上で表明され、それを共有し合うことで互いの平和への意識を高める。

2-2方法

1）3冊の絵本(まちんと・My Hiroshima・わたしのやめて）を日本語・英語・またはスペイン語で読み、その感想をMachinto　Forumに投稿する。更にMachinto絵本作者：松谷みよ子さんの生前の皆さんへのメッセージ録画を載せました：
https://iearn.schoology.com/page/5843800409

2）Machinto Resourcesに載せられている原爆に関するビデオなどで、より深く理解する。

3）個人・グループで平和への願い・活動をビデオ・本・詩・など形にしてForum上で共有する。

4）ZOOM会議で時差を調整しあいパートナー校と語り合う。

5）活水女子大学による、長崎被爆者とのPeaceTalks。

3. 活動内容

3-1　Machinto 参加国紹介

Argentina,USA, Taiwan, Pakistan, India, Japan, iEARN-Latina

3-2　Exchange Argentina, USA, Taiwan, Japan

Phase 1-Getting to know each other

●高森高校（岩国）ビデオによる学校紹介・自己紹介
https://iearn.schoology.com/course/5282275540/materials/discussion/view/5328273018

●Greetings from Wilmington High School(USA) by slides https://iearn.schoology.com/course/5282275540/materials/discussion/view/5328267309

●Self Introductions from Colegio Superior N 1 de Rawson in San Juan, Argentina

Phase 2 - Machinto Activities

● Bade JHS (Taiwan) 3 PDF Stories https://iearn.schoology.com/course/5282275540/materials/discussion/view/5377921260
"Grandpa's Reunion"
"The Bygone Years"
"Forever The Promise"

● 高森高校　33名による詩や物語 https://iearn.schoology.com/course/5282275540/materials/discussion/view/5543589287

●Wilmington HS - Machinto Project 2021 - 20 doc slides(poems,arts,etc...) file:///C:/Users/Yoko/Desktop/WHS+Machinto+Projects+for+Learning+Partners+2021.pdf

●各発表に対して、互いの感想やThank you mes sageのやり取り、また仙台市上杉山中学校生徒による多くのコメントが寄せられた。Machinto Project 2021 Featured in the Nove mber iEARN NewsFlash
Argentinaによる高森高校とのMachinto交流記事
https://iearn.scho ology.com/course/5282275540/materials/discus sion/view/5481243075

Phase 3 - Reflection & Closing

●高森高校11名のMessges of Thanks
https: //iearn.schoology.com/page/5804418890

3-3　Hiroshima Peace report
高槻市北日吉台小学校6年生による広島訪問平和学習報告forPeaceビデオ
https://vimeo.c om/680866649
password: hiroshima
Machintoを始めた高木が住む高槻市からの初めての参加である。

3-4　長崎　Peace Talks
●Bogota Colombia participated in a Pea ce Talk on May 6, 2021 with Nagasaki su rvivor Mr. Michio Hakariya.
●Pennsylvania, USA participated in a s eries of Peace Talks with survivors Ms. Mitoe Matsumoto and Mr. Yoshihiro Oba

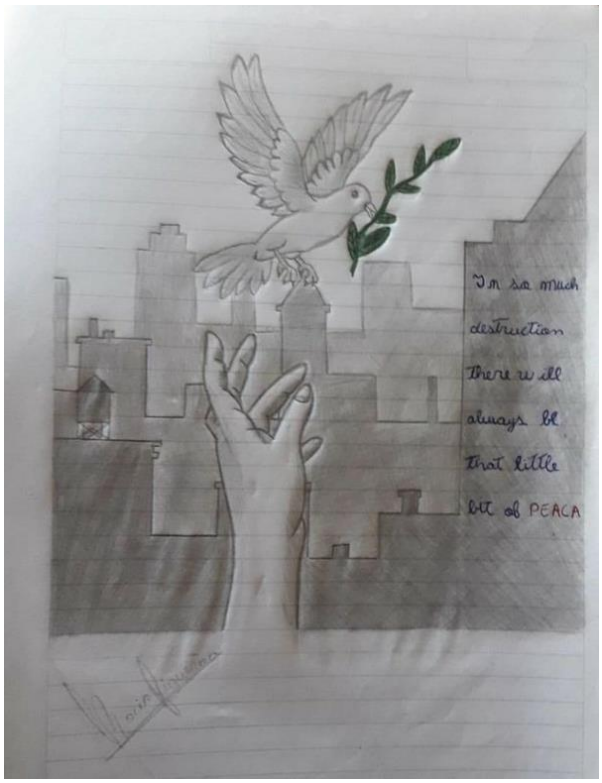
3-5 iEARN Latina Machinto 2021-2022
In Spanish:
https://iearn.schoology.com/course/5282275540/materials?f=502983415

3-6　Hibakusha All over the World
●2022年1月半ばに高森高校生1年～3年生による世界の被爆者の事実・現状・意見が、各学年毎に総勢80名弱の生徒によってPDFで投稿された。原爆だけでなく原子炉・汚染・ウラン・核実験・発電・他、多岐に亘る被爆者に目を留めた内容で、これを指導された赤松先生に敬意を表したい。
●彼らの投稿に対して、最初に反応したのは、Wilmington高校(USA)23名である。高森高校3年生投稿に対して、生徒名・トピック・サイト・自分のコメントが述べられている。
●次なる反応は、仙台市上杉山中学校である。高森高校1年・2年の投稿に対して、61名の生徒たちがコメントを送った。
●詳しくは、別途、赤松先生による”Machinto -Hiroshima/Nagasaki　for　Peaceに参加して”レポートを参照。

3-7　Students' Reflections
・仙台市上杉山中学校・高森高校
・Wilmington HS・Joy Class

3-8　Teachers' Reflections
Catalina(Mexico)
YuHsien (吳俞嫻) (Taiwa n)
Yuri　Akamatsu　(Joy　Class)/
赤松敦子（高森高校）

Machinto Art Gallery
Argentine and Japan(高森高校)



4．成果と課題

iEARN Collaboration CenterのSchoology Formatへの移行による全面的な記入変更を学習し、対応するために多くの時間を必要とした。
今でもFacilitatorにとってはチャレンジである。各参加教師の報告スタイルが異なるために、それらをいい形でアップするための試行錯誤を重ねた。徐々に、多くのJEARNメンバーの助けを得ながら、メール機能も備えたこの新しいSchoologyの良さを認識し、使い慣れて誰にとっても生徒たちのMachinto活動が共有されやすく、協働の場・発信の場へと展開したい。
また2021年度は、特に日本の高森高校、仙台上杉山中学校、明石JOY　CLASSの積極的な取組・協働がありがたかった。

GOMI on EARTH
～ゴミの長い旅～

Project Facilitator　高木洋子

わたしは GOMI である。近年の地球温暖化問題、プラステック問題、そして SDG11 並びに SDG 14 に深く関わるゴミに対して、iEARN を通して世界の子どもたち・生徒たちが身近な GOMI への意識 に目覚め、未来の地球を護るためのGOMI 活動へと展開する。

GOMI探検家　GOMI活動家　世界のGOMI現実　プラゴミ

1. はじめに

2017年に発足した本プロジェクトは 早くも５年間の活動実績を積み”ＧＯＭＩ”という単語は既に日本語を超えiEARN の中でも馴染んできた。更に世界に通用する言葉として GOMI on EARTH 活動を継続する。

２．目的と方法

2-1 目的

まずGOMIへの意識を育てる。自分の手から離れる身近なGOMIから始まり、家庭の、学校の、地域の、日本の、そして地球規模のＧＯＭＩへと興味・関心を広げ深める。参加国間のＧＯＭＩ事情を共有しGＯＭＩ活動を展開する。

2-2 方法

Schoologyを使ったiEARN Collaboration Center“GOMIonEARTH”に設定された各Folderに沿って進める：
https://iearn.schoology.com/course/5310785473/materials?f=518249735

1) GOMI News
2)学校紹介・参加者自己紹介
3) PartI:ＧＯＭＩ探検家
4) Part2:世界のＧＯＭＩ現実
5) Part3: GOMI活動家
6) Mottainai Workshop
7) Final Projects

３．活動内容

3-1 GOMI News 多くのNewsの中から：

● Cartoon GOMIC
Dr.HiroshiTakatsukiによるCOMICと名付けられたGOMI漫画を紹介。14名のKaohsiung Jhengsing中学生（台湾）が個々に気に入ったCOMICを選びその感想を述べた。

● MTES小学校（台湾）の子供たちによるGOMIの歌がiEARN News Flash のトップを飾る

3-2 学校紹介・参加者自己紹介

台湾4校･インド1校･日本1校が紹介
https://iearn.schoology.com/course/5310785473/materials?f=504863593

3-3 PartI:ＧＯＭＩ探検家

●MTES小学校6名の生徒が1週間のGOMI記録を紹介・クラス発表シーン

●Jhenasina中学校（台湾）
10名の生徒がGOMI Logをメッセージと共に投稿
●Wunshan高校（台湾）
25名がHouse hold GOMI Surveyを投稿
●Lincoluton高校（LHS）(USA)
以下の個人またはグループで投稿
17名 GOMI Plastic Survey
11名 Our New thoughts
9名 GOMI Regarding Public Places

3-4 Part2:世界のGOIMI現実

現実を学ぶ資料”Reading & Videos”を見た生徒たちからコメントが寄せられた。この行動は、GOMIスタート以来、初めてである。

●MTES小学校（台湾） 6名
●LHS高校（USA） 6名
●kaohsiung_jhengsing高校（JIHS）（台湾）6名
●Wunshan高校（台湾） 15名
新しいGOMIビデオの紹介もあった。

3-5 Part3: GOMI活動家

台湾の生徒たちの最も活動的なGOMIへの取組が投稿されている。多くの皆さんと共有したい台湾GOMI活動家たちの投稿です。

● Xin-Xing小学校 ８JPGより：
Gomi group presentation

● MTES小学校 Final GOMI Presentation
Lovely singing video:”2021 iEARN in MTES”
https://youtu.be/QAPP1FKBY1o
“There comes a time when we hear a certain call…..”

● Jhengsing中学校
９ nice desigh the posters
https://iearn.schoology.com/course/5310785473/materials/discussion/view/5333535036

● Wunshan高校
8 GOMI Presentation Slides
https://iearn.schoology.com/course/5310785473/materials/discussion/view/5333559227

3-6 Mottainai Workshop

「Youth facilitator実践としての学び」
岡田麻唯先生（青山学院大学）レポート掲載

3-7 Final Projects

This is the Final Projects by the students from India and Indonesia.
There are 17 students creative video, PDF, PPTX, etc as Cumulative Projects- Posts and Discussions.
加えて、多くのKaohsiung jhengsing高校生(台湾)による各作品へのコメント、更にコメントへの Thank you messagesなどが、GOMIでつながる本プロジェクトのハイライトとなっている。
https://iearn.schoology.com/course/5310785473/materials/discussion/view/5310796705

Lastly one special poster by Clive Tauro from Dubai Scholars Private School, United Arab Emirates:

4 成果と課題

●成果
「要らない」と手から離したGOMIがどんな運命を辿るのか、小学生にも興味を持って欲しく、GOMI探検家やGOMI活動家へと誘い込むと、生徒たちがノリノリにGOMIの世界へ入り込み、投稿される作品は内容とともに表現も素晴らしい。
特に台湾数校のGOMI参加は、2021年度の中心となって、2022年度の現在も続いている。

●課題
やはり日本の生徒たちの参加が欲しい。また GOMI FoldersのSchoology化に伴い、トライ＆ラーンを繰り返し、生徒たちの作品を見やすく載せる試行錯誤が続いている。最近になって当プロジェクト全員へのニュース発行機能を知り、生徒たちの作品投稿の度にお知らせニュースを発行。
リアクションが早く多くなっているようだ。それにつれて生徒たちのＧＯＭＩ作品を、訪問者が何度もクリックして辿り着く手間なく、アップできる工夫が求められている。今後の課題である。

グローバル・シティズンシップを育む
防災教育プロジェクトの構築と普及

パンデミック時代の国際協働学習

防災世界子ども会議実行委員会 実行委員長 納谷 淑恵
プロジェクト創設者 岡本 和子

2021 年は、東日本大震災 10 年の節目の年であり、阪神淡路大震災から四半世紀を超えた 26 年目にあたる年であった。防災世界子ども会議は、子どもたちが、過去の災害を振り返り、将来起こる可能性のある災害に備えるとともに、現在猛威を振るっている新型コロナパンデミックという新しい災害にも立ち向かうプロジェクトである。世界の子どもたちが交流を通して、主体的に問題に取り組み、協働し、テクノロジーを駆使して成果をまとめ上げ、世界に向けて発信する。まさにグローバル・シティズンシップの形成を目標とする実践プロジェクトであると言える。本稿では、2021 年 8 月 26 日に行われた Zoom での成果発表会を中心に、その方法、成果、課題について紹介する。

SDGs　国際協働学習　防災教育ネットワーク デジタル化　グローバル・シティズンシップ

1. はじめに

新型コロナパンデミックは、世界の動きを一変させ、人々に行動変容を促した。新型コロナからの教訓として、デジタル テクノロジーが教育において重要な役割を担っていることを浮き彫りにした。

防災世界子ども会議(NDYS Natural Disaster Youth Summit)は、2004 年にスタートした、オンラインと対面融合のハイブリッド型によるネットワークを通した「国際協働学習」による持続可能な防災教育の促進を目的とする日本発のアイアーンプロジェクトである。

2020 年の成果発表会は、実際に新潟市に集まり成果発表を行う計画であった。しかし、感染拡大予防の観点から、実際に集まる会議をやめ、Zoom による発表会をおこない成果を収めた。

2021 年度は、2020 年度の経験を基に 3 月、「自然災害と感染症の複合災害の危機をどう生き抜くか」をテーマに、防災のための SDGs ネットワークを通して、「防災世界子ども会議 2021」の国際協働学習をオンラインで始めた。

2021 年 8 月 26 日、世界同時緊急事態宣言下、学校の閉鎖や授業のオンライン化などで混乱の最中、成果発表として、オンラインによる「防災世界子ども会議 2021in 四日市」を開催した。８の国・地域の子どもたちが参加し、国際協働学習の成果を発表し、宣言文を未来に向けて採択した。

参加可能な世界の小中高校生が、主体的にすすめてきた防災学習の成果を Zoom でオンライン発表することに決定し、パンデミック禍であっても国際協働学習の成果発表の場をもつことができた。

本稿では昨年 8 月 26 日に行った、成果発表会について報告するとともに、グローバル・シティズンシップの形成を目標とする国際協働学習の可能性について述べたい。

２．防災世界子ども会議　ロードマップ

2005 年 1 月、防災世界子ども会議は、神戸での阪神・淡路大震災 10 周年記念事業「第 2 回国連防災世界会議 パブリックフォーラム」開催を機に、ひょうごで生まれ育った子どもたちが、「自分たちの震災経験やそこから得た教訓を世界の子どもたちに伝えよう、未来へ生かそう」という目的で、兵庫発アイアーンのグローバルプロジェクトとしてスタートした。

防災世界子ども会議は、デジタル・ツールを活用し「世界と学ぶ！」をスローガンに「国際協働学習のモデル」として、教育実践を積み重ねてきた。これまでの教育形態ではできなかった国境を越えた国際協働によるグローバルな視点での問題解決型学習の先行研究実践である。

３．目的と方法

3-1 防災世界子ども会議が目指すものは、

①地域を創生する 主体的な市民の育成

地球規模での防災意識を共有しながら、それぞれの国・地域にあった持続可能な社会づくり（防災文化の醸成）を目指して、SDGs 達成を担う、次世代の市民を育成する。

②グローバルなデジタル・シティズンの育成

国際協働によるプロジェクト学習の実践で、地球は一つの視点から、地球規模の課題解決を

担うなど、イノベーティブなグローバル・デジタル・シティズンを育成することである。

3-2 成果発表会の方法と参加校
　プロジェクト参加校は、成果発表会に向け、地域の災害安全マップやパワーポイントによる発表資料の作成を行っている。また、災害後の心の癒し、および各国・地域の文化紹介としての音楽発表の練習も同時に行っている。2021 年度は、8 の国・地域 9 グループの発表があった。
成果発表会参加グループは以下である。

１日本　(廣田元子、羽津っ子カウボーイ四日市、三重県)
　Japan (Motoko Hirota, Hazukko Cowboy, Yokkaichi, Mie)
２インドネシア（ダイアン・ノヴリニ、 SMP イスラム　アルアズハー　９ -ベカシ ）
　Indonesia (Dian Novrini, SMP Islam Al Azhar 9 - Bekasi)
３ウクライナ　（リュボブ・シャモバ、カーキフ特別学校　No. 75、カーキフ）
　Ukraine (Lubov Shamova, Kharkiv Specialized School № 75, Kharkiv)
４コロンビア　（ロシオ・リヴァラス）
　Colombia (Rocio Rivillas , 10mins)
５マレーシア（コー・GH、セマンブセカンダリースクール、パハン）
　Malaysia (Khor GH, Semambu Secondary School, Pahang)
６インド（ジータ・ラジャン、セントマークス高校、ニューデリー）
　India (Geeta Rajan, St. Mark's Sr. Sec. Public School, Meera Bagh, New Delhi)
７インドネシア（サーラ・スアイブ、SMP イスラムアルアズハー４４校、ベカシ）
　Indonesia (Saara Suaib, SMP Islam Al Azhar 44 - Bekasi)
８　日本（久保聡一郎、横浜市立幸ヶ谷小学校）
　Japan (Soichi Kubo, Yokohama Municipal Kogaya Elementary School)
9　台湾（チ・チェン・ウ、シャンフア高校、台南）
　Taiwan (Chi-Chen Wu, National Shanhua Senior High School, Tainan)

４．活動内容

4-1　成果発表会概要
タイトル：防災世界子ども会議 2021in 四日市
日時：2021 年 8 月 26 日（日）
テーマ：「自然災害と感染症の複合災害の危機をどう生き抜くか」
プログラム：
特別講演　各国グループ発表　総評
NDYS2021 宣言文採択
参加者：100 名（見学者を含む）
発表者：８の国・地域 9 グループ

4-2　具体的な実施内容
　成果発表会は、四日市市の学習グループ「羽津っ子カウボーイ」の生徒が発表会の総合司会の役割を担う予定であったが、当日機器のトラブルで思うように司会ができなかった。生徒は英語と日本語のシナリオを作成し準備をしていたので大変残念であったが、オンライン会議にトラブルはつきものであり、参加者の協力で発表会を進めることができた。。
　特別講演は台湾のアイアーン理事の Doris Wu 氏及び数名の先生方によって、台湾で行われた NDYS をテーマとしたユースキャンプの活動が紹介された。

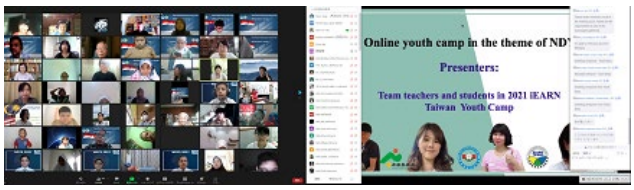


写真１　台湾の発表の様子

　会議のまとめは、アイアーンインドネシア代表でありユネスコインドネシアの代表でもあるハスナ・ガシム(Hasnah Gasim)氏によって総評が行われた。

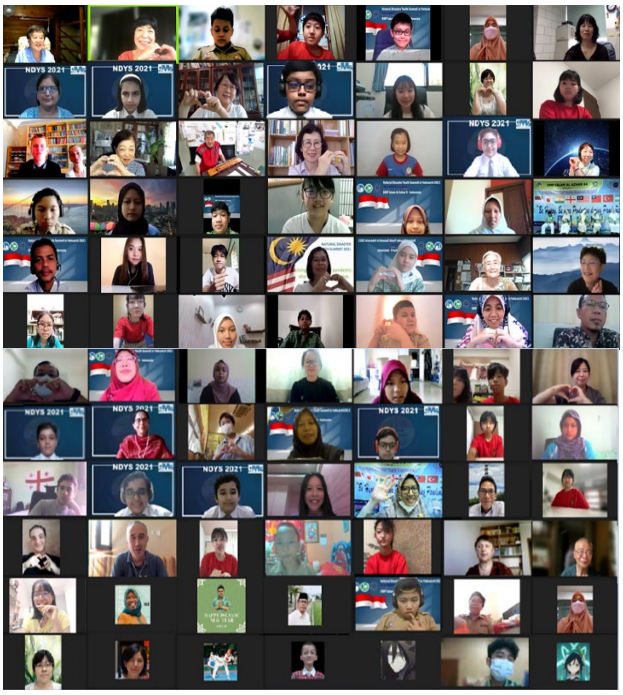


写真２　Zoom 参加者の様子

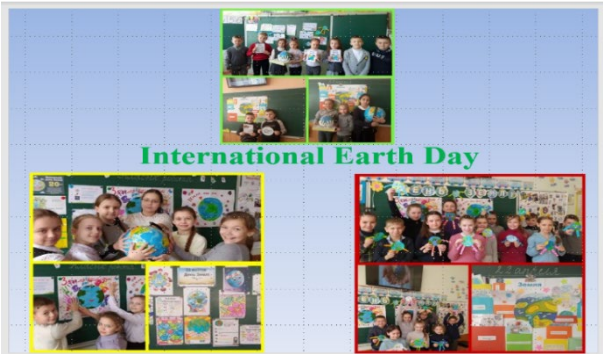


写真３　ウクライナの発表資料

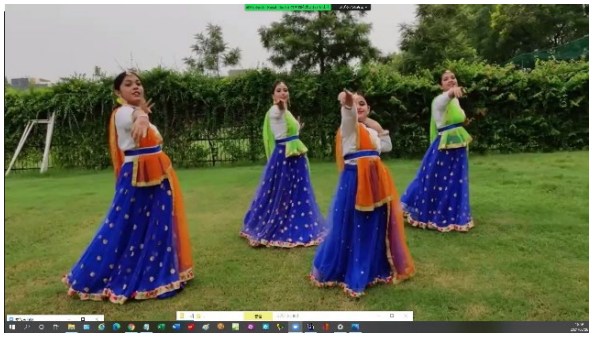


写真４　インドの生徒による文化紹介

５．成果と課題

〇成果１　地域の災害安全マップ
防災世界子ども会議「グローバル災害安全マップをみんなでつくろう！」プログラム
地域の災害安全マップの発信

写真５　マレーシアの高校の災害安全マップ

〇成果２　NDYS2021 宣言文
NDYS では、毎年プロジェクトの締めとしてこれからなすべきことを集め、宣言文を発信している。2021 年の宣言文は以下のとおりである。
Preparedness is the key to safety! (India)
Reach out to each other and let's brave the storm together! - (Malaysia)
Creativity never comes to end even in pandemic – (Indonesia)
"Sharing is caring"(Georgia)
Have each person's consciousness. (Japan)
Be Happy - You will be more productive in pandemic! (Indonesia)
If we battle together against the coronavirus in the morning and at noon ,
the victory will be very, very soon. (Ukraine)
Let's collaborate with people all over the world. (Japan)
Let's be the best, we can all right. (Colombia)
We can change the world! (All together)

〇成果３　NDYS2021 実践 e-レポート
参加の学校は、NDYS 実践報告の書式でレポート（英語記載の PDF）を提出。公式ページで公開

写真６　羽津っ子カウボーイの e-レポート

〇課題
2021 年は、G I G A スクール構想の実施に伴い、児童生徒への１人１台のタブレット端末の配布が進み、教室（ローカル）から世界（グローバル）につなぎ、オンラインで世界の状況に触れることができるようになった。子どもたちが SDGs に関わる取り組みや考えをデジタル・ツールをつかって世界へ発信可能となった。
2022 年には、Society5.0 への国家の戦略を下敷きとし、2004 年から防災世界子ども会議が先行して取り組んだ「国際協働学習」の仕組みが、新たな学びの形の一つとなる可能性がある。
7 月に、防災世界子ども会議は、コトリンピック実行委員会と協力し、新潟の会場と世界の学校を Zoom でつなぐハイブリッド型の成果発表会を計画している。世界が戦争などで不安定化する今、オンラインで新潟の発表会場と世界の学校をつなぎ、「多様性」「市民性」を学び、互いが共存できる平和と安全を希求する場としたい。

参考資料：
https:// ndys.jearn.jp/
https://ndys.jearn.jp/2021/general-comment-j.html
https://ndys.jearn.jp/NDYS-road-map.html

THE TEDDY BEAR PROJECT REPORT-2021

Puppala Rasagnya
TBP Coordinator

The Teddy Bear project aims at the goal of connecting young children in classrooms across the globe. This year each of our bears is supporting one of the Sustainable Development Goals to help spread awareness in schools around the globe! The project has been aiming at acknowledging student personal experiences, their perspectives on the present and the future, sharing student outlooks globally and creating international peace throughout the world through a teddy bear.

Teddy bear will show the world we are ready for peace and harmony.

1. The COVID-19 pandemic has led to a dramatic loss of human life worldwide and presents an unprecedented challenge to public health, education systems and the world of work. School closures due to COVID-19 have brought significant disruptions to education across the globe. In an environment of war, violence and fear, school attendance and education quality can decline, and schools might even shut down.
Theme 2021-2022: Sustainability to keep up with the pandemic and war.

Teddy Bear Project has had wonderful teachers and students sharing their learnings during this pandemic and even though we have noticed a decline in registrations when compared to 2020 ---however it did not dampen the zeal of the Project.

2. As a result, education has changed dramatically, with the distinctive rise of e-learning, whereby teaching is undertaken remotely and on digital platforms. Some students are without reliable internet access and/or technology struggle to participate in digital learning; this gap is seen across countries and between income brackets within countries. This hindered the smooth completion of quite a few partnerships of the Teddy Bear Project. This year we had very few successful partnerships completing and showcasing their work on schoology. Some participants also complained that they were more acquainted with old iEARN website/forum and the new forum/schoology was confusing. However the newly registered teachers seemed to smoothly access the forum. Additionally lockdowns and border closures have caused a major disruption to Teddy Bear postal services. The main objective of posting the Teddy of the TBP is also changing according to the times…pandemic!

3. During the March 2021 to November of 2021 we have had registrations from new teachers and also old participants from Russia and Ukraine. The partnerships did start off but have now been stopped abruptly due to war. The sad part is that we still have not got replies from these teachers about their safety.

TBP-Active Members Report		
Year	2020	2021
No of Registrations	34	17
No of partnerships	7	8
Carry on Partnerships from 2018	-	-
Unsuccessful Partnerships	12	4

Events:

On November 18th 2021 at the Mikanodai Elementary School, Osaka City, the students from India, Japan, Taiwan and Philippines

exchanged their views on how to keep us active using dance street theme and collaborating by using V2 Conference.

On November 3rd 2021 at the Suzurandai Jidoukan Kobe City, the students from India Japan, Taiwan, Indonesia and the participants from Australia had their teddy bears on zoom meeting.。

Fig 1: Teddy Messages

Fig 2:Q&A Session

Fig 3: Presentations

4. This year's highlights include Nippon Bunrei University High School Students collaborations and exchanges on the TBP Forum. Chitose Elementary School students presentations also stand out on the Forum. The collaborations between Colombia and Taiwan added new learnings to the Forum. However since October 2021 we haven't heard back anything from the teachers of Ukraine and Russia.

We will entrust the help of schools and exchange virtual data to promote love care and responsibility among the students as global citizens through the Teddy Bear Project.

iEARN Projects で異世代国際交流

～Origami と Folk and Culture Project を使って～

神戸市立すずらんだい児童館　福井　良子

1. はじめに

児童館には幼児から高校生まで幅広い世代の子どもたちが集まってくる。ここでこの数年 iEARN ZOOM を使った国際交流を行っている。異なった年代が助け合いながら国際交流を行う意義は児童館という特殊な場でこそできることがある。

２．目的と方法

異なる世代が同じ日に国際交流するには、交流の中心に小学生をおき、中学生・高校生が彼らをサポート国際した。国際交流活動を通して、年少者は知識・英語力を尊敬して見本とし、年長者は年少者を導くことで人に作る価値観に目覚め、社会への貢献の自覚を育てるのが目的である。

1） 実施計画案

国際交流イベントは１日で行う。小学生を対象としたため、海外の交流校は小学校を選んだ。テーマの設定・発表内容などの事前の打ち合わせは指導者同士で行った。日本側の発表は２つに分け、中学生・高校生がテーマに沿った事前に練習した発表、小学生は当日作成したカードをもとに発表した。

作成したカードは Origami 作品とともに交流校へ郵送した。

３．活動内容

実施日：2021 年 11 月 3 日（水曜日）

場所：神戸市立すずらんだい児童館

テーマ：“Dream”

参加人数：

日本側：33 名（中学生 10 名、高校生 4 名、小学生 15 名、幼児 4 名）

海外：約 60 名　（以下参加学校名）

１．Suncity School Gurgaon, (デリー)、

２．The Global edge school(ハイデラバッド)

３．Via Catelbelvederge 3（イタリア）

具体的な実施内容

当日の活動は 2 部構成とした。

１．カードつくりワークショップと発表練習

２．海外との交流と発表

カードつくりワークショップと発表練習

小学生たちに当日の流れと目的を説明したあと、６つのグループに分けて発表原稿（カード）を作成して発表練習を行う。各グループには 2～3 名の中高生が作成・発表補助を行った。

海外との交流と発表

iEARN ZOOM を使って海外とつなぎ、まずは海外から発表を行う。最後に日本側から中高生各 1 名が事前に用意した発表を行い、その後各グループ１名づつ小学生が発表を行った。

写真１中高生のサポートを受けながらカードつくり

写真２小学生による発表

写真３ZOOM 会議の様子

写真４当日小学生たちが作ったカードに Origami を添えて交流校に郵送した。

４成果

〇成果

世代間交流とは、世代の異なる人が相互に交流し、互いの生活文化や価値観の理解を深めるために行われる活動のことである。人間は、生涯を通して家庭、学校、地域社会や職場等で行われる様々な営みから自分づくりを行う。これらの生涯学習活動における世代間の交流活動は、互いに持っている能力や知識・技能などの交流・継承、深化・発展に大きな学習効果をもたらすものと期待できる。（谷川：世代間交流と生涯学習より）

児童館を国際交流の場とする意義は、単に海外との交流だけでなく、年長者・年少者が互いに学び合い成長するまたとない機会になっている。

青少年ペンフレンドクラブ（PFC）
―海外文通の取組―

日本郵便株式会社
郵便・物流事業企画部　切手・葉書室
青少年ペンフレンドクラブ

青少年ペンフレンドクラブは「Peace（平和）」「Friendship（友愛）」「Culture（教養）」の三信条を基に、国内はもとより世界中の人々と「手紙のやりとり」を通じて友情を深めるとともに、世界中で起こる様々なことに関心を抱き、思考を巡らせ、また、意見を交わすことにより、平和な社会の構築に取り組むクラブである。1949 年 6 月に「郵便友の会」として発足し、現在は手紙文化振興という観点から、弊社が運営している。

PFC(青少年ペンフレンドクラブ)・海外文通・ペンパル紹介・会報誌（Letter Park）・国際交流

1　はじめに

手紙を通じた国際交流活動の促進として、iEARN（アイアーン）及び JEARN（ジェイアーン）のネットワークで展開するPFC 海外文通プロジェクトにて交流を呼びかけ、児童・生徒のペンパルリストを入手、PFC 会員との海外文通活動に取り組んでいる。

2　目的

手紙のやり取りを通して、国際親善、国際理解、相互理解の促進に努めることを目的としている。

3　方法

毎月発行の会員情報誌「Letter Park」の「海外ペンパル紹介コーナー」に、毎回約 30 名分の文通希望者情報（国名、名前、年齢、趣味等）を掲載。PFC 会員からの紹介申込受付後、当会から申込者に希望相手の連絡先をお知らせし、手紙の交換（文通）を行う。

4　活動内容

2021 年度（2021 年 4 月～2022 年 3 月においてはiEARN 及びJEARN のネットワークを通じて得た 44 名の海外ペンパルリストを会報誌に掲載し、PFC 会員からの文通申込みは 87 名であった。（「表 1」参照）

5　成果と課題

2020 年度に続き 2021 年度も iEARN 及び JEARN のネットワークから海外ペンパルをご紹介いただき、当会員と手紙のやり取りを通した海外交流の橋渡しができた。コロナ禍の影響により海外の学校の閉鎖などの理由で前年度より掲載数と申込み数が減少してしまったが、コロナの状況が回復した際には以前のように多数の海外の生徒から掲載の申込みが来る事を願っている。また、Web での入力フォームを作成した事により、手軽にペンパルアプリケーションフォームが送れることができるようになり、世界の様々な国からの申し込みが多数来るようになった。

2022 年度も引き続き、海外ペンパルの紹介目標人数 2,000 人に向けて、PFC 会報誌等を通じて海外文通への取組を働きかける。

表 1　2021 年度　海外文通の取組　iEARN からの申込みに対する掲載・紹介人数

掲載号		国名	学校名	掲載人数	紹介人数（申込み人数）
2021 年	4 月	モルドバ	IPLT Petru movila lyceum	5	16
		スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	10	8
	5 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	5	3
	6 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojn	4	0
	7 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	7	17
	8 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	6	22
	9 月	スロベニア	Osnovna š ola Miroslava Vilharja Postojna	4	1
	12 月	ガーナ	Dreamyard Educational Complex	3	20
合計		3 カ国	3 校	44	87

小学校実践編

コロナ禍だからこそ際立ってきた国際協働学習

～コロナ禍での交流のリアル～

金沢市立大野町小学校　角納　裕信
金沢星稜大学　清水　和久

現小学校に赴任してから、継続して、Teddy Bear Project に参加してきた。今年度で６年目になる。ひとつの学校で続けて実践していることでその効果と今後の課題が見えてきた。国際理解教育に対する考え方である。中心となる地域・学校が同じであるので、時代による政治的背景、保護者や児童の考え方の変化、学校教育の変化による効果や課題が見えやすいのである。本レポートでは国際協働学習が必須であることについて記述する。

1. はじめに

GIGA スクール構想により、国際協働学習を環境も教職員も保護者の意識も高まり、以前に比べると、非常に始めやすくなった。

ICT を活用することで国際交流ができる一番大きいメリットは、実際にネット上で疑似的に会える TV 会議を実施することが可能なことである。

働き方改革が叫ばれる学校現場において、特に嫌がられることで、多忙化の原因になっているのは、実践すると児童のためになるという理由からどんどんすることが増えていく「ビルト＆ビルト」となっていることである。

Teddy Bear Project は、「ビルト＆ビルト」にはならないことについても述べていきたい。

２．目的と方法

2-1 目的

日本以外の外国と実際に交流することを通して、お互いの文化を尊重する態度を養い、交流を通して、友達同士になることにより、平和への意識に繋げていくことが、最大の目標である。

2-2 方法

1） 実施計画案の作成

・交流校：台湾の高雄市立新甲国民小学校
・英語教諭：Sandy 先生

現在の学校のカリキュラムにおいて、国際協働学習の時間をどこに配置するかはとても大きな問題である。単独の時間割はないので、活動の時数確保のために、教科横断的に、「社会科、総合的な学習、学級会活動、英語、道徳、図工」の時間数を横断的に使って国際協働学習の時間を確保していく。新たに付け加える時間はなく、既存の時間と内容の中に組み込んでいくので、「ビルト＆ビルト」にはならないのである。

プロジェクトの活動時間：(45 分×Ｘコマ)
1 単位時間は、45 分間である。それぞれの教科の中に組み込んでいくので、Ｘは、その時の教科の時数が入る。カリキュラムの中にきちんと位置付けていくことが今後の課題でもある。

２）内容項目

今回の報告での目玉であるＴＶ会議で発信したり受信したりする内容が重要である。5 年間同じ国の同じ学校との交流を続けてきているが、GIGA 構想で、TV 会議が容易になったことで、初めて TV 会議を実施することができた。ＴＶ会議自体のノウハウは持ってはいたのだが、今までは、回線や機材の環境に恵まれなかったので実施はあきらめていた。

３）評価方法

国際交流全般を通しての英語への意欲、クラスの雰囲気等、児童観察、様子により判断することとした。

３．活動内容

3-1　実施内容の観点１（文化交流をメインに）

主に、地域の文化交流である。初めてのＴＶ会議という事もあり、お互いの学校紹介、地域紹介、文化紹介、お互いに対する質問という構成とした。

3-2　実施内容の観点２（横断的教科配分）

外国語を学ぶための意欲付けとなるように、そして、幅広い視野を持つ基礎を養うように、活動を精選して無理なく活動できる持続可能な入れ込みとなるように組み立てる。

表１　国際交流の教科横断的な位置づけ

順番	項目内容	関連教科
1	台湾調べ　国際理解	道徳
2	自己紹介カード交換	英語
3	校区紹介、偉人調べ	社会
4	ＴＶ会議	英語
5	Christmas Card 交換	図工
6	帰国に向けて	総合

＊本レポートでは、今年取り組んだ TV 会議について重点的に述べたい。

3-3　実施内容の観点３（ＴＶ会議）

GIGA スクール構想で、一人一台のタブレットと高速大容量通信が可能となったことは、TV 会議を行う上で、大変優位に働いた。

表２　ＴＶ会議の構成

	内容	担当
1	日本の司会の挨拶	日本
2	校長先生の話	日本
3	学校自慢	台湾
4	学校紹介	日本
5	（台湾の司会に交代）	台湾
6	台湾文化紹介	台湾
7	日本の地域紹介	日本
8	終わりのことば	台湾

写真１　TV 会議の様子（日本側）

TV 会議の時間は、60 分間とした。一方の発表が長く続くと、ずっと聞いている方は集中力が続かなくて飽きてしまう。結果、手遊びが始まったり、退屈してしまったりする様子が相手側にも見えてしまうので、交互に発表することにした。

写真２　TV 会議の様子（台湾側から見た映像）

天井には扇風機がいくつもあり、日常的にも暖かい台湾の様子がよくわかる。このような様子はＴＶ会議をしているときは十分わからないが、後で写真をもらうと相手校の様子がよくわかって理解が深まる。適度に聞いたり、話したりする場があると飽きずに聞ける。

４. 成果と課題

〇成果

・TV 会議をするまでに、台湾の事について調べたり、自己紹介カードをやり取りしたり、台湾からおくられてきた自己紹介 VTR を見たりして交流相手国や交流相手に興味関心を持った状態から、TV 会議に入ったので、集中や意欲の度合いが、非常に高いように感じた。

・交流相手からは、ダンスやファッションショーがプレゼンされた。音楽やダンスにのって盛り上げようとする雰囲気も見られ、非常に楽しい交流会になった。音楽や動きがあるとわかりやすいと感じた。

・一人一人が、英文を覚え、発表する等、何らかの役割があったので、一人一人の自己有用感や自己存在感が満たされ、台湾との友達とも共感的理解が生まれたように感じられた。

〇課題

日本時間 11：00～12：00（台湾時間 10：00～11：00）であったため、GIGA 回線の高速回線といっても、ビジータイムだったためか、通信の帯域不足で画像が乱れる場面があった。

・１年１年、毎年、交流相手校に確認して、「今年もできますか？」と連絡し合ってから始めるため、カリキュラムは、その時その時、入れ込むしかないのが現状である。

・今後、交流内容についても SDGs の観点を入れて、交流していきたい。また、テーマごとに小グループ同士での話し合いもさせてみたい。

・今後も台湾の新甲國民小とのつながりは切ることなく、継続してし続けていくことが出来たら、と思う。

・コロナ禍で、GIGA スクール構想が前倒しとなり、早まったことと、「国際理解教育」の重要性が、浸透してきたことが、TV 会議が容易に学校でも認められてできるようになってきた大きな要因であると思われる

写真３　これまで留学させた歴代の Teddy　Bear
左が初年度であり、だんだん大きくなっている。

SDGs未来都市から海外へ発信

～テディベアプロジェクトを通して学んだもの～

珠洲市立蛸島小学校　牛﨑　絢香

珠洲市の小・中学校では、総合的な学習の時間で SDGs 学習に取り組んでいる。世界中で取組がなされている SDGs について、テディベアプロジェクトを通して、海外の学校と交流をすることで、さらに学びを深める機会となると考えた。海外の友だちと協力し、一緒に取り組んでいく必要性を実感したり、伝えることができる交流のチャンスを活かし、相手意識をしっかり持ち表現できるようにしたりしていけるように、５・６年生の複式学級１５名で取り組んだ。

1. はじめに

珠洲市は「能登の尖端”未来都市”への挑戦」を提案とし、地域創生の促進を目的として、SDGs 未来都市に選定された。市内の小学校高学年の総合的な学習の時間では、SDGs を意識した学習が進められ、今年度が２年目となる。SDGｓ１７の目標の中から、地域の特色を生かしたゴールを選び学習を進めている。

蛸島小学校の校区には漁港があり、漁業で栄えた町に位置する。そのため、児童にとっては海がとても身近に存在する。このことからゴール１４「海の豊かさを守ろう」について学習を進めることとした。台湾の精忠小学校でも SDGs 学習に取り組んでおり、ゴール１３「気候変動に具体的な対策を」について学習していくとのことだった。テディベアプロジェクトを通して、台湾の児童と交流を図り、SDGs 学習を学び合うことは、世界で行われている持続可能な地球であるための取組を実際に外国の児童も学んでいることを知り、世界で協力しあって取り組んでいかなければならないという実感を持たせることができるのではないかと考えた。また珠洲市の海岸には、日本のゴミだけでなく、中国、韓国、台湾など様々な国のゴミも流れ着いていることが分かった。国境や文化を超え、自分たちにできることはなにかを伝え合い、実践していくことができることに意義を感じた。

２．目的と方法

2-1 目的

SDGs 学習を進め、学んだことを海外に発信し交流することで、よりよい未来の地球にするために共に考え、見出していく。また「海の豊かさを伝えたい、海を守るためには台湾の友だちにも取り組んでもらいたい」という相手意識や目的意識を持ち、より意欲を高めていくために行う。

2-2 方法

１）実施計画案

総合的な学習の時間４５分×５０ コマ

～海の豊かさを守るために私たちにできることを台湾の友達に伝えよう～

テディベアプロジェクト・外国語４５分×８コマ

２）内容項目

①【課題の設定、知識及び技能】

海の豊かさや問題を知るための体験活動

②【整理・分析、振り返り】

地域の漁師さんや企業が行っている、海を守るための取り組みから、自分たちにできることを考え伝える

③【主体性、協働性、まとめ・表現】

学習したことを交流する

地域の特性を活かした石鹸作り

（台湾の友だちへのプレゼント作り）

３．活動内容

①海上体験や塩田村での塩作りを体験し、豊かな海に恵まれていることを実感した。一方、海にプラスチックのたらいが海に浮いて流れていくところを船の上から発見したり、海岸には、様々な国の言葉が書かれたごみが打ち上げられていることを知ったりした。また、奥能登国際芸術祭では、作品の一つに、実際に珠洲の海に打ち上げられているごみを使い、「このままで良いのか？」と環境問題を訴えるようなアート作品を見学して、ごみの種類や大きさ、どこから来たものなのかを知ることができた。

写真１：海の上体験

写真２：奥能登芸術祭

②蛸島の底引き漁師さんと定置網の漁師さんから、海を守るための取組をお聞きした。水産資源を守るために、国や世界でルールがあることや、海で拾ったごみを漁港に持ち帰ってきていることなどを知ることができた。企業は、工業排水を魚が住めるくらい綺麗にしてから海に戻していたり、エネルギーをあまり使わないような商品開発をしたりしていることを知ることができた。学んだことから、自分たちにできることは何かを考えた。児童たちからは、エコバックを使うことや、給食を残さずに食べること、環境に良い商品とは何かを考えながら買い物をすること、詰替商品をなるべく買うようにすることなどが挙げられた。

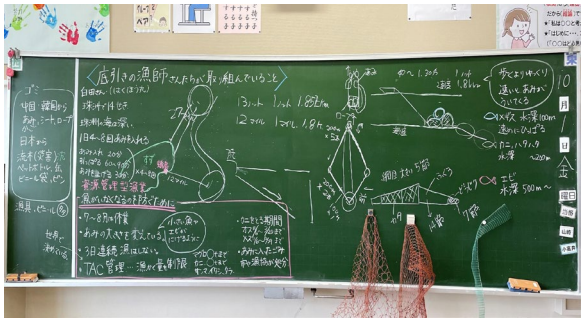


写真３　底引き漁師さんから学んだこと

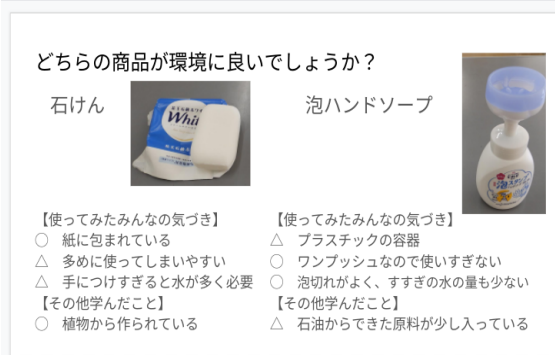


写真４　環境に良い商品とは何かを考える

③様々な体験活動や、地域や企業の方たちから学んだことを考え、自分たちにできること、台湾の友だちにも取り組んでもらいたいことを考えながら、スライドを 5.6 年生の児童 15 人で共有し作成した。また、石鹸作りを行い、台湾の友だちに使ってもらえるように、テディベアを返す際に一緒に送付した。赤、青、黄色の３色から作り出すオリジナルの色や、ヒバの木の香りや、ラベンダーなどの香り付けを楽しみながら取り組んだ。時間が合わず、台湾の友だちと直接テレビ電話を通しての交流はできなかったが、台湾の先生から送られてきた発表の動画を見て、SDGs のゴールは違うが、やっていかなければならないことは共通していると感じたようだった。

写真５　完成した自作の石鹸

４．成果と課題

〇成果

・珠洲の海に、外国からのプラスチックごみが打ち上げられていることや、海に浮いていることを知ることで、日本だけでなく、海外の人との協力の大切さを感じさせることができた。

・海を守るための取組について、日本だけでなく世界的に決められているルールがあることや、世界に進出している（台湾に支社がある）企業も取り組んでいることを知ることができた。

・一緒に同じゴールに向かって頑張る友だちが台湾にもできたことが、子どもたちの中で新鮮で嬉しかったようだった。

・台湾の友だちの学習を聞いて、自分たちが学んできたことと繋がっていること、さらに自分に取り組めることはないかと考える児童の姿が見られた。

・共通するテーマで海外の小学生と学習することを通して、視野を広げ、世界とのつながりを感じさせることができた。

〇課題

・GIGA スクール構想で１人１台の学習用パソコンを活かし、日常的に台湾の友だちとコミュニケーションが取れる場を設定しておけば、もっと相手意識を高めることができたのではないかと考える。（例えば、スライドやジャムボードでペアの児童同士と先生を共有し、日常的に写真やコメントを送り合える環境を作ったり、LINE などのように自動で日本語文章を英語や中国語に翻訳できるソフトが入っているものを活用したりするなど）

・交流し学んだことを、実践する時間の確保が難しかった。台湾の友だちの話を聞いて、自分にもできることを考え、取り組んでみた内容を、台湾の友だちともう一度交流ができると、学習へのフィードバックになったのではいかと思う。そのためには交流の見通しと、時間の確保を早めにしていく必要がある

英語学習への意欲向上につながる異文化交流プログラム

テディベアプロジェクトをとおして

長岡市教育委員会　星野　和子

英語力の向上には、土台に英語や異文化への興味関心、英語を学ぶ意欲の高まりが必要と考えている。そのような高まりを引き出す方策として、テディベアプロジェクトが効果的と考え、長岡市の小・中学校５校、８学級がプロジェクトに参加した。テディベアなどの人形（以下、ベア）への愛着を深める事前の取組やオンライン交流を活動の中心に据え実践を行った。

意欲　テディベアプロジェクト　交流活動　愛着を深める活動　オンライン交流

１．はじめに

当市の英語教育では、英語という言葉をとおして、人と人が出会い、かかわりを深めていく体験を重視している。英語を使う活動をとおして、楽しみながら英語の表現に触れ、異文化を体験する機会を設定して、英語の世界や異文化への興味関心、英語を学ぶ意欲を高め、英語力の向上につなげたいと考えている。

実際に英語を使用して外国の人と交流し、異文化を肌で感じる機会を求め、令和２年度からiEARNのプロジェクトに参加することとした。

２．目的と方法

2-1 目的

テディベアプロジェクトに参加し、海外の児童生徒との英語による交流活動をとおして、次のことを目指す。

1) 英語を学ぶ意義や目的を体験的に理解する。
2) 異文化について興味関心を高め、体験的に学ぶ。
3) 他国の人と積極的にかかわり、多様な価値観に触れる。

2-2 方法

1) 実施計画

対象学年は小学校４年生～中学校３年生までとし、学級単位での参加を原則とする。市内小・中学校に希望を募り、８学級を選抜する。

各学級での準備期間及び交流期間は令和３年９月から令和４年３月までとする。

小学校では外国語活動や外国語の時間、中学校では英語や総合的な学習の時間に実施する。

2) 内容項目

ベアを自学級の同級生と仮定して過ごし、留学先に送り出す過程を大切にして愛着を深めるように配慮する。さらにそのベアが留学した相手校の児童生徒と SNS 等を通じて直接英語で交流を行う活動を重視する。

3) 評価方法

以下のレポートとアンケートをもとに、成果と課題を検証する。

・参加学級の学校職員による事後レポートの内容
・参加学級の児童生徒に実施するアンケート結果

３．活動内容

3-1 参加学校・学年・児童生徒数・相手校等

学校名	学年学級	人数	相手校
浦瀬小学校	５年	13	台湾中学校２年
才津小学校	６年	16	台湾小学校４年
豊田小学校	５年１組	36	台湾小学校３年
	５年２組	34	台湾小学校６年
	５年３組	36	台湾小学校４年
寺泊小学校	６年１組	19	イギリスクラブ（7～11 歳）
	６年２組	19	ウクライナ
岡南中学校	１年	20	台湾中学校２年

3-2 活動の実際

1) 愛着を深める活動

相手校に自校のベアを送る前に、ベアのプロフィールを作成し、学級で諸活動をともに行うなど、自学級の一員として留学前のベアと過ごす中でベアへの愛着を深めた。

2) 日記や手紙等の交換

お互いに留学してきた相手校のペアとの学級生活や家庭生活について英語で記した日記を交換した。また、英語で作成した自己紹介カードや年賀カード、お礼の手紙、外国語の授業で作成したスピーチ原稿などを相手校に送付した。

3) オンライン交流や動画配信

Meet を使用し､お互いの自己紹介に十分な時間を使った。学校や地域について、絵や実物を使って英語で発表し合ったり、クイズ形式で伝え合ったりした。また、留学生のペアを紹介する動画や身近な生活や文化についての動画を配信した。

写真１　オンライン交流の様子

3-3 プロジェクト推進会議

交流前後で３回、活動の進捗状況を伝え合い、情報交換を行う推進会議を行った。学校職員がお互いの活動内容のよさに感心し、自身の学校での実施に意欲を見せる場面が多く見られた。

４．成果と課題

参加学級の学校職員による事後レポートの内容、児童生徒に実施したアンケートの結果から、活動の成果と課題を検証する。

4-1 成果

1) 異文化理解への興味関心の高まり

事前学習では、相手国の歴史や相手校の様子等について調べたり、調べた内容を友達と伝え合ったりした。交流活動では、相手校の子どもたちと手紙や日記を交換したり、オンラインでつながったりするなど、今まで経験したことのない真正のコミュニケーション活動を行うことができた。

児童生徒は多様な文化や考え方に触れることができ、相手国の文化や生活への興味関心を高めることができた。

2) 英語使用や英語学習への効果、意欲の高まり

英語で日記や手紙を書く、日本や長岡の特色などを伝える経験を積む中で、その難しさに直面しながらも「もっと英語ができるようになりたい、勉強したい」と願う児童生徒の声があった。また、英語に苦手意識をもつ児童生徒の中には、意欲的に活動に取り組む姿も見られた。

総じて、英語で海外の児童生徒と交流できた喜びや達成感を学級全体で共有しながら、英語学習への意欲の高まりを感じ取ることができた。

3) 相手意識による動機付け

伝える相手が存在することにより、相手を思いやる心が生まれた。児童生徒は、相手に「理解してもらいたい」「喜んでもらいたい」「伝えたい」と願うようになり、「言葉を簡単にする」「絵や写真、ジェスチャーを使う」「情報を切り取ってシンプルにする」など、工夫を凝らして伝えた。

相手を実感できる設定は、相手意識を高め、活動への動機づけに効果的だっだと言える。

4-2 課題

1) 交流活動における不安定さの解消

学校は相手校を自らの力で探さなければならない。その状況を前にして、楽しみだと前向きにとらえた学校と、教育委員会事業なのだから相手校は委員会により確保されるものと予想していた学校があり、実際に相手校が決まらず不安感をもち学校で相手校を探すのは厳しいと感じた学校もあった。

また、理由は明確ではないが、途中で相手校からの交信がなくなり交流が途絶えてしまった学校、相手校の職員と考え方が異なり、日記や手紙の交流は実現したがオンライン交流が実現できなかった学校があった。

教育委員会として、このような不安定な要素を丁寧に取り除いていく必要がある。そのために、今後はサポート会議等をとおして、進捗状況を確実に把握し、学校相互の情報交換・共有をタイムリーに行うなど、きめ細やかに支援していく。

2) ICT 関係の不安定さの解消

長岡市の学校と相手校の ICT 環境に違いがあったが、学校職員同士で相談し、連絡をとる際の方法やオンライン交流の方法などを検討した。特にオンライン交流では、声が聞こえづらいなど音声面での課題が目立ち、相手校とのコミュニケーションに支障が出る場面もあった。

今後は、ICT の活用について担当指導主事を通じて学校職員への支援を継続的に進めていく。

５．おわりに

外国の同世代の児童生徒に自身や学校、地域を紹介するという現実的な目的をもって、英語で意欲的に交流活動を行うことができた点は大変意義深い。外国の人との出会いへの緊張感、外国の人とつながる喜び､外国の文化の違いへの驚きなど、心が動く体験は、英語学習を下支えするものである。このような取組を持続可能なものとするために､今後も有効な方策や手立てを講じていきたい。

Machinto Project 実践報告

英語教室　JOY CLASS　赤松　由梨

1. はじめに

2021 年４月開催のアイアーン学習会で、Machinto project の報告に大変感銘を受けたのがきっかけである。日本で起きた原爆投下に世界の多くの人が関心を持って取り組んでいるのに、日本の学校は関わっていない事を知り、教室の中３生から高 2 生までの有志２０名で取り組むことを決めた。

２．目的と方法

2-1 目的

Machinto プロジェクトは広島、長崎に落ちた原爆が何をもたらしたかを知り、平和について考え、世界の同世代の子どもたち達と国際協同学習を通して、戦争のような悲劇を二度と起こさないために何ができるかを考えることを目的とするプロジェクトである。

今回初めての取り組みであるので、まずは原爆投下や第２次世界大戦について調べ学習を実施し、自分に何ができるかを考え、実行できるアクションを考え、実行することを最終目標とした。

ファシリテーターの高木洋子先生と Kristine 先生のご協力、アドバイスの基で参加国は日本からは英語教室 JOY CLASS の中３から高２生までの有志２０名とアルゼンチンの Institite Santa Isabel 高の２６名が３段階で交流を持ち、平和への理解を深めた。

３．活動内容

活動は３つの段階を踏まえて行った。

〇Phase 1　Get to know

6/12　アイアーンフォーラムに互いの自己紹介文を投稿し、文字での交流を図った。自教室の生徒は全員ではなく、有志での参加となったので自己紹介文をフォーラムする事でプロジェクトへの正式な参加表明とした。アルゼンチンの生徒の自己紹介文を興味深く読み、音楽など同世代としての共通点を見つけたりして、地球の裏側のアルゼンチンの国にも興味を持ち、プロジェクトへの参加へのモチベーションがアップした。

〇Phase 2

7/9 Zoom での対面交流

Zoom での対面交流会に向けて、事前にファシリテーターの高木洋子先生、Kristin、アルゼンチンの Cathrine 、赤松、小林の５名で zoom ミーティングを持ち、それぞれの国に興味を持つよう、学校紹介や地域紹介を事前に準備することウォームアップアクティビティを各自考えることを決め、当日を迎えた。

時差が１２時間あるため、日本時間は夜の８時、アルゼンチンは朝の８時開催となった。アルゼンチンの Institite Santa Isabel 高はコロナ渦で１年半学校へ行ってないとのことで、日本からもアルゼンチンからも生徒は全員各自の家庭から zoom に接続した。当日はまずアルゼンチンの Catherine のアイデアで,アルゼンチンと日本の生徒が交互にお話を作り続けていく活動をした。双方に初めて会った割には打ち解けて、自分達だけの英語でやりとりできていた。日本からは日本に関するクイズを出した。風鈴に関するクイズは文化の違いも出て興味深い活動となった。その後 4、5 名の少人数グループに分かれ自己紹介や QA タイムで交流を深めた。アルゼンチンの生徒達の英語は比較的聞き取りやすく、Kristin 先生がタイピングによるサポートしてくださったおかげで、概ね理解できているようであった。実際に対面した事で調べ学習への士気がぐんとアップしたようであった。

写真１　zoom 発表会の様子

○Phase 3

１回目の zoom 交流から約１ヶ月後の 8/6　広島平和記念日をプレゼンテーションの日と決定し、Zoom で自分達の調べたことを発表した。生徒だけでなく、指導者である自分も日本人でありながら、原爆について正しい知識も、強い意見もなく過ごしてきた。この壮大なテーマをどのような切り口で進めればいいのか、最初は生徒自身も戸惑っていたようだが、高木洋子先生が送ってくださった Machinto や My Hiroshima の絵本を一緒に読み、感じたことを大事にして、難しく考えずに、自分にどんな事ができるか、どんな事が知りたいかを考えて進めるように励ました。中学生の時に英語の教科書や、課題図書で読んだ本からヒントとなり、進める人もいれば、社会の教科書の記述を参考に広めていく人もいた。

こちらからは以下２点の約束ごととして決めた。

１．調べ学習は、インターネットを多用しない。教科書や新聞なども参考にすること。出典先を必ず明記すること。

２，最後に必ず実行可能なアクションを発表すること

調べ学習に費やす時間があまりない中３生は教科書(New Horizon 東京書籍)に出てくる本文を練習し朗読をした。気持ちをこめて、音読をした後、自分でできるアクションを一人ずつ発表した。高１生は、佐々木貞子さんの生涯について紙芝居形式で発表をして、一人ずつアクションを発表した。高校生クラスでは、一人の生徒から「ある夏の日の朝」小手毬るい著というアメリカの高校生が原爆をテーマにディベートをしている内容の本を皆で読んではどうか？との提案があり、図書館で借りたり、回し読みしたりして全員読み、各自がそれぞれに感じた事を基に調べ学習をした。

アクションは、教科書に載っていない事も自分で調べて事実を知るよう自分の周りにいる人、自分の子どもや孫に核の恐ろしさを伝えたい、選挙に行く前に候補者の戦争についての意見をしっかり見て投票するなど自分目線のさまざまな意見が出た。教科書での記述部分についての比較や、原爆投下の真の目的について更に深く調べたり、核の威力について調べたりなど自分の気になることを掘り下げて、発表することができた。

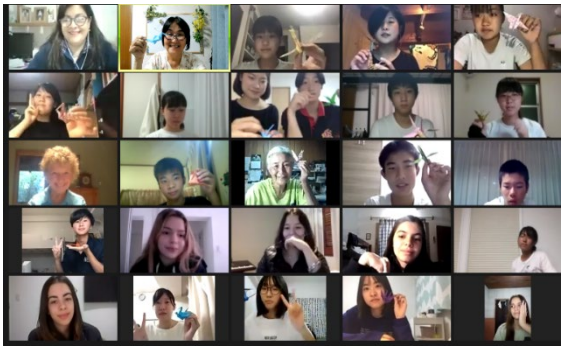


写真 2. Zoom 発表会の様子

４．成果と課題

成果

・多角的な物の見方の習得。

原爆投下に対する賛成、反対だけでなく、なぜ原爆が落とされたのか、なぜ日本なのかと疑問をもった生徒もいれば、日本自身も戦争で隣国にひどい事をしてきたという見解にたどりついた生徒もいた。一つの事実に対して、様々な角度から考えることができた。

・メディアリタラシー力の向上

調べ学習をする際、インターネットでの検索が主流になるが、全ての情報をうのみにしないこと。また戦時中は情報が操作されていたとの事実を知り、情報を取得する際に気をつけるようになった。

・英語学習に対する動機付けの向上

調べた結果を英語でプレゼンの準備をし、アルゼンチンの生徒さんに通じるように何度も練習をしていた。実際に伝える相手がいることで、英語学習にたいする動機付けの向上が見られた。

課題

英語力以前に文章を読み取る読解力、思考力にも個人個人で大きな差がある。高校生の発表は、表や絵があっても理解できない中学生もいた。また聞き手のアルゼンチンの高校生に通じていたのかも疑問。

テーマを選び、調べ学習のプレゼンがほとんどだったので、次回に取り組むことができれば、もっと感性を生かした作品作りなどにもチャレンジしたい。

ファシリテーターの高木洋子先生、Kristin 先生は最初から最後までずっと伴走していただき、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

中学校・高等学校実践編

SDGｓの目標16と17をテーマとする英語の授業の試案
―Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peaceを通して―

仙台市立上杉山中学校　若生深雪

中学２年生の英語の授業で、SDGsの目標16「平和と公平をすべての人に」と17「パートナーシップで目標を達成しよう」の２つのテーマの理解を同時に深めるため、「Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace」（以下「Machinto」と略す）を活用した実践を試みた。授業では、「まちんと」の絵本、他校の学習成果物、「Machinto」を作った高木さんの講話などオーセンティックな教材で学ばせ、国内外の若者と英語で交流させた結果、世界の仲間と一緒に平和を希求しようとする姿勢を身に付けさせることができた。

平和教育　SDGs　「国際的、自立的、協働的」　「思考・判断・表現」

１　はじめに

ここ数年、教育界ではSDGsの17目標の考えを取り入れた活動が注目されている。SDGｓ学習では、目標16「平和と公平をすべての人に」と目標17「パートナーシップで目標を達成しよう」は、全ての目標を実現するための礎となっているため、特に重要な目標である。しかし、多くのSDGs学習では、この２つの目標の重要性を念頭に置いて学習させている授業は少ないように思われる。

２　実践の目的と方法

前述のような背景から、英語の授業で、国際共通言語である英語の学習と国際交流の要素を取り入れた平和教育を実践する。そうすればSDGsの２つの重要目標が有機的に結び付き、２つの目標の真の意義を、理解させることができるのではないかと考えた。そこで、今回の実践は、「Machinto」を活用し、英語を使って広島と長崎の原爆について学ばせた。また、実践の目的は、SDGs の２つの目標の意義を、どのように、そしてどの程度、生徒に理解させることができたかを明らかにすることとした。

授業の方法は、平和の大切さを繰り返し学習させながら、段階的に幅広い知識を与え、さらに深く考えさせていく流れとした。具体的には、原爆の悲惨な過去と向き合わせる。また、日本が加害の立場であったことも直視させた上で、その思いや意見を国内外の若者と交換させた。授業の柱は、「国際的」「自立的」「協働的」とした。学習の過程では、新学習指導要領の「思考・判断・表現」の観点を取り入れた。すなわち、思考を働かせ問題の原因を考えさせ、自分の判断で解決策を導き出し、周りに意見を伝え合わせることによって深い学びにつなげた。なお、今回の一連の授業は、パイロット授業としての扱いであったため、英語の授業としての評価は行わなかった。

３　効果の確認方法

授業観察、ワークシートへの記述内容、「Machinto」へ投稿したコメント内容から学びの様相を確認する。

４　活動内容

2021年度、仙台市内の公立中学校の２年生、29人に対して実施した全７コマ（50分）の授業の目標と、その達成に向けて実施した活動を以下に記載する。

1）11月10日

「唯一の被爆国である日本の特別な立場に気づかせる。」

・松谷みよ子著「まちんと」の絵本の紹介とプロジェクトの説明を聞いた。個別のタブレットを使用し、広島と長崎の原爆の調べ学習をして、ワークシートを完成させた。平和に対する意識を調べるアンケートに答えた。

2）11月24日

「被爆者の体験を知り、原爆の恐ろしさを語り継ぐ大切さに気づかせる。」
・下記の映像資料
アニメ ヒバクシャからの手紙｜NHK 原爆の記憶 ヒロシマ・ナガサキ
原爆に関する資料映像｜NHK 原爆の記憶 ヒロシマ・ナガサキ
と筆者が作成した「原爆の概要」のスライドを英語と日本語で視聴した。
3）11 月 29 日
「戦争体験者の話から、自分にできる平和活動とは何かを考えさせる。」
・「Machinto」を作った高木さんとオンラインで結び日本語で講話を聴いた後、質問をし、交流を行なった。講話を振り返るワークシートに取り組んだ。
4）12 月 3 日
「真珠湾攻撃と原爆投下の相反する視点から、SDGｓ2 つの目標の重要性に気づかせる。」
・筆者が作成したスライド「両国の視点」を英語と日本語で視聴した。
5）3 月 2 日
「他校の若者の学習成果物を鑑賞し、平和を願う心の普遍性を実感させる。」
・「Machinto」へ投稿した山口県立高森高等学校の生徒 33 人の学習成果物、台湾の桃園市立八徳国立中学の生徒たちの 3 作品に対して、投稿用の英語のコメントを作成した。
6）3 月 4 日
「近年の核実験と原発事故等から、放射能に関わる課題を考えさせる。」
・「Machinto」へ投稿した山口県立高森高等学校の生徒 59 人の学習成果物「ヒバクシャ」に対して、投稿用の英語のコメントを作成した。
7）3 月 18 日
「平和を大切にする思いを確かめさせる。」
・全 6 回の授業を振り返り、投稿用の英語のコメントを作成した。

なお、活動で作成したコメントは、筆者が 1 つにまとめて、「Machinto」に投稿した。その際、作文の細かい文法上の間違いは、意味が分かれば添削せず原文のまま投稿した。また、iEARN の他のプロジェクトで作成した、生徒の自己紹介の動画も投稿した。

5　学習の成果

次に成果をまとめる。「Machinto」の実践は、SDGs の目標 16 と 17 の理解を深める授業展開と多様でオーセンティックな教材で、2 つの目標を多角的に考えさせ、その大切さを理解させることができたと思う。以下にその詳細を述べる。

「国際的」「自立的」「協働的」のキーワードについて、授業観察から成果を振り返る。まず、国際共通語である英語を使って、地球規模の課題に取り組ませたので、世界の仲間の一員であるという自覚を芽生えさせ「国際的」のキーワードを達成させた。次に、7 時間分の平和教育の蓄積の効果は高く、海外の若者と堂々と「Machinto」を通して意見を交換した達成感は大きかった。これは、「自立的」に平和への問題意識を高く持つ大人に成長させるきっかけを作れたのではないかと思う。最後に、リアルタイムでの交流ではなかったが、「Machinto」のプラットフォームを介して「協働的」な学びが実現できた。とりわけ、同年代の若者との交流は、学習への高い動機づけに結びついた。台湾の八徳中学校からは、学校紹介のパンフレットや台湾土産が郵便で届き、今後のパートナー校としてのつながりができた。

最初のワークシートでは、「唯一の被爆国に生まれた自分たちは、原爆について後世（日本人）に伝えていく使命がある」、と考える傾向が強かった。学びの最終では、「戦争を無くすため、自分の役目は何だろう」、と視野を広げ自分ごととして捉える能動的な姿勢へと変化していった。1 人の生徒の最終コメントを下記に紹介する。

The war is actually happening now. It's not too far from us. We must convey the horror of the atomic bomb. I want a world without war. I learned the fear of nuclear weapons. I would like to know correctly and take action.

6　課題

平和について深く考えさせ、理解を促すには、用意周到な授業計画と、十分な授業時間の確保が必要であると感じた。今回は、英語の授業の中から 7 コマを確保したが、学習成果物としては、他校に対してのコメントだけであった。時間確保の課題を克服し、SDGｓの礎となる目標 16 と 17 を深く学ばせる必要がある。それには、全ての英語教科書会社が教科書に掲載している平和教育の題材を学習する際、「Machinto」を発展的に取り込み、世界の学生と交流させることが有効であろう。

Gmailを活用した異文化交流の試み
―スロバキアの中学生との交流から―

仙台市立上杉山中学校　若生深雪

異文化を理解させる力を育むため、中学2年生の英語の授業で、スロバキアの生徒との文化交流を行った。交流内容は、自国や自分の生活する町を紹介する動画やスライド、そして物々交換であった。主活動となったメール交換は、両国の生徒でペアを組ませ個別に交流させた。今回の交流は、授業者と学習者の双方にとって初めての試みであり課題も残ったが、概ね、英語の有用性への気付き、ICTスキルの向上などの相乗効果も見られ、成果の多い交流となった。

メール交換　異文化交流　Chromebook GIGAスクール構想

1　はじめに

日本の英語教育界では、海外への興味・関心を高めることが、世界の共通語である英語の学習への動機づけになるとしている。今回は、単発の文化交流ではなく、ある程度の時間をかけ、相手国の生徒との関係性を構築しながら、異文化への関心を高めることを目標とした。

2　実践の方法

2021年度、仙台市内の公立中学校の2年生2クラス58人と、12歳～15歳のスロバキアの58人の生徒が文化交流を行った。以下にその内容を報告する。日本では、GIGAスクール構想が実現し、生徒に1人1台のChromebookが貸与された。そこで、教育機関向けGoogleのサービスを利用して、動画、スライド、ドキュメント、そしてメールを交換する交流を立案した。

1)　Gmailの交換方法

日本の生徒が使うGmailは、校内間のやりとりに限定されているため、筆者が全ての生徒が送受信するGmailのゲートキーパーとなった。なお、生徒のメールにはスロバキアの教師のメールアドレスも送信先リストに入れて、メールの共有をした。

2)　授業の手続きと内容（時系列）

9月初旬、筆者は、iEARN内のプラットフォームに1対1のペアで文化交流を提案するパートナー校募集の投稿をする。9/16、スロバキアのiEARNの会員から協働プロジェクトの提案があり、文化交流の実施を決定する。9月下旬、両国の保護者に授業の内容を説明し、参加の承諾書を回収する。9/30、参加生徒の名簿の交換をする。日本の生徒が作成した自己紹介の動画を送る。10月初旬、両国でGmail利用時のエチケットや共通ルールを生徒に確認させる。10/14、スロバキアから自己紹介の動画を受け取る。メール交換のペアのマッチングを行う。10/22、スロバキアの生徒へ筆者のGmailアドレスを伝え、メール交換が開始する。10月下旬、国の文化を紹介するスライドを交換する。12月初旬、スロバキアへ電子ホリディカード送る。1月下旬、町紹介（スロバキアのZilinaと仙台市について）の動画を交換する。2月下旬、スロバキアへ郵送する贈り物を生徒に考えさせ、自宅から持参させる。贈り物の使用用途などを説明する手紙を作成させ同封する。輸送中の紛失などの対応策として、各自が贈り物を説明する動画を撮影し、記録用として保管する。3月初旬、2箱分の贈り物を両国より発送する。3月中旬～4月上旬、お互いの贈り物を受け取った後、メールと写真で感想を報告し合う。最後のメール交換をする。次に、主活動となったメール交換について詳しく報告をする。

3　メールの交換

メール交換のタイミングは、それぞれのペア間のペースに任せた。よって、各自が送付したメールの回数は、5～15通とペア間での差異が生じた。内容は文化的なことに限定しなかったため、お互いの日常の出来事、季節の行事、趣味のスポーツや音楽、そして本など自由に話題が広がった。

両国にとって、メールを使って生徒を個別に交流させるのは初めての試みであった。馴染み

のない文化背景を持つ生徒同士のメール交換が上手く成立するかどうかは予想ができなかった。筆者は当初、日本側の生徒が克服しなければならない課題として以下の４点を考えていた。1)Chromebook の機器の操作、2)違う文化背景を持つ生徒への接触方法、3)メール交換を円滑に進めるための共通の話題作り、4)お互いの意思疎通を図るための英語力。実際の授業では、上記の４つの課題は、日本の生徒たちの異文化に触れあう期待感の強さで、以下のように、難なく授業が展開した。1)については、生徒は、学校教育で情報機器に触れる経験がほとんどなかったにも関わらず、家庭で携帯電話やゲーム機などを頻繁に利用し、教師が予想していた以上に機器の操作に明るい生徒が多かった。機器の操作が得意な生徒は、そうでは無い生徒に積極的に教え、教師が何人もの生徒へ個別に操作方法を教える必要は無かった。2)同年代との交流に強い関心を持ち活動ができた。お互いの文化や生活習慣の違いは、違和感ではなく、むしろ、やり取りを進める上での話題となっていた。3)ほとんどの生徒は、やり取りの過程から、共通する話題や相手が返信し易い話題や質問を考え、相手意識を持ちながらメール交換を継続させていた。そのため、最初の段階では、多くの生徒が自己紹介や日常生活の話題からスタートし、メール交換が進むにつれて、独自の掘り下げた話題に変化していった。4)AI 翻訳の使用方法（酒井，2020）を指導した後、生徒たちは、google 翻訳と Deepl を、英文作成をする時の足場架けとして活用した。全てのメール交換から、意味が通じず添削が必要だと認識したメールはわずかであった。その内の１通は、日本語の主語の使い方が不正確なまま英文へ翻訳し、逆翻訳の操作でメールの意味が正しく伝わることを確認しなかったための誤訳であった。その他の３、４通は、語彙の選択が不適切で、生徒の意図が十分に伝わらないと認識したメールであった。なお、これらのメールについては、該当生徒へ英文添削の指導を行い（和泉，2009)、新たに作成し直したメールを送った。

４　学習の成果のまとめ

異文化への理解は、スモールステップの活動が蓄積して大きな成果となった。次に、2 人の生徒が書いた振り返りの作文を紹介する。

「外国人との交流がすごく良かった。気軽に話すことができたし、今まで習ってきた英語を活用することができた。そして、英語だけでなく、クロームブックの使い方なども学ぶことができた。」

「今までは、日本語が通じないことは、大変というイメージを持っていて、外国の方との交流に消極的だったが、アナマリアさんとメールを始めてから、日本人でなくても共通の趣味があったり、スロバキアの文化を知ることができたり、自分の好きなものが共有できたりと、とても楽しかった。今まで少し恐れていたことに挑戦できる良い機会だった。」

５　課題

筆者が、今回の文化交流で感じた限界を２つ述べたい。まず、普段授業で使用している指導方法が、今回のような多様な活動に対応しきれないことである。コミュニケーションを行う目的や場面、状況に応じた適切な文体や展開方法を導くジャンル準拠教授法（松沢・安宅，2016）を、日本人の英語初心者向けに開発する必要がある。そうすれば、メール交換、プレゼンテーション作成と発表、オンライン会話などの交流場面で、その活動にあった定型文と言い回しなどを使って、より実践的な英語表現で交流させることができるであろう。次に、日本側の個人情報保護の観点から、両国の活動が制限されたことが挙げられる。その１例は、生徒たちは型にはまった英語の授業を飛び出し、SNS などの日常生活でも関わることを希望した。しかし、ゲーム、Instagram、TikTok など世界の若者がコミュニケーションのツールとしているアプリは、学校教育の枠組み外であると考えられてる。よって、筆者は、それらを利用させ個人間の交流を勧めることはできなかった。生徒を日常生活の中から国際化することを進めるには、保護者に向けても国際化を啓蒙し、協力を得ていくことが必要であろう。

写真１　スロバキアからの贈り物の一部

５　参考文献

和泉伸一(2009).『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店.

酒井志延(2020).「グローバル化時代における日本の大学の機械翻訳を使った複言語教育の研究」『言語教師教育 JACET 教育問題研究会会誌』*7(1)*,51-64.

松沢伸二・安宅いずみ(2016).「まとまりのある文章を書く力の指導と評価の改善 ―ジャンルと学習・練習・評価タスクを用いて―」『関東甲信越英語教育学会誌』*30(0)*,167-180.

“Girl Rising Project”の実践

― 高校３年生選択授業「国際理解」―

啓明学園中学校高等学校　関根　真理

持続可能な開発目標（SDGs）には、目標４「質の高い教育」と目標５「ジェンダー平等」が含まれている。生徒は本プロジェクトで上記の目標に関する国際的な課題に向き合い、世界中の女子がより質の高い教育を受けることで、女子を起点とした良い変化が起こり、社会を変えていく原動力を生むことを学習することができる。

質の高い教育　　女性の人権　　国際協同学習　　課題発見　　課題解決

1. はじめに

本プロジェクトは、筆者がマララ・ユスフザイ氏の勇気ある行動に共感し､｢iEARN｣の Teachers Forum で「女子教育の大切さ」についての協働学習を提案したことから始まった｡筆者は 2014 年度より、Ed Gragert 氏と共に新プロジェクト「Girl Rising」のファシリテーターとなり、女子が教育を受けることの大切さを学ぶ場をつくっている。

２．目的と方法

Girl Rising プロジェクトでは、①開発途上国で女子がどのような境遇にあるのかを知り、②教育を受けた女子がどのように変化し、周りに影響を与えることが出来るかを学ぶ。さらに、他国の生徒と協働学習することにより、③自国や他国に存在するジェンダー問題を発見し、④課題を解決するために立ち上がってアクションを起こす取り組みをしている。

プロジェクトは、9 ヶ国（アフガニスタン・インド・エチオピア・エジプト・カンボジア・シエラレオネ・ネパール・ハイチ・ペルー）の少女の映像（DVD または Youtube）を視聴することから始める。DVD はファシリテーターの Ed Gragert 氏が提供していて、どの国の映像を学習するかについては、担当教員の判断による。ストーリーの内容と提起する課題は国によって異なるため、対象生徒の年齢や関心等を踏まえて、適切なテーマを教員が選択している。テーマ決定後は、生徒が映像を視聴し、iEARN の学習プラットフォームに挙げられている質問に回答する。

啓明学園の「国際理解」の授業では、4 ヶ国の課題や情勢について学んでいる。生徒は課題を解決するためにはどうしたら良いかをクラスで話し合って模索した後、個人の意見や感想をフォーラムに投稿している。フォーラムでは、他国の生徒と意見を交換し、互いの気づきや学びをさらに深めることができる。テキスト形式のみならず、写真やビデオレターなどの投稿も可能で、互いの時間が合えばオンライン会議を実施することもできる。

３．活動内容

2021 年度は、本校の「国際理解」の授業を選択した高校 3 年 27 名の生徒が Girl Rising プロジェクトに参加した。本校は海外から帰国した生徒が多く在籍しており、英語教育が盛んな特徴がある。そのため、本授業を選択している生徒の半数以上が海外在住経験があり、英語が堪能である。

今年度は本プロジェクトを通して、５ヶ国（アメリカ・インド・イラン・トルコ・ルーマニア）の高校生と協働学習をすることができた。生徒は Girl Rising の映像を視聴し、女性であるが故に人権が侵害される文化や風習があることを知った。また問題解決にあたり、自分たちがどのように関わるべきかについて意見を交換をした。

1 学期の授業では、カンボジアとネパールの少女のストーリーを取り上げた。生徒は映像を視聴した後、iEARN の Collaboration Center（旧タイプのプラットフォーム）で感想や質問を投稿し

た。ネパールの少女の映像を視聴した後には、Zoom を用いてネパールの教員を招聘し、ネパールの現状について生徒が尋ねる機会を持った。

《 ネパールの教員を招いて 》

ネパールの教員から話を聞く中で、ネパールには親の借金を理由に児童に労働を強いる風習“Kamlari”があることや、“Kamlari”が 2006 年に違法となった後も、地方でこの風習が残り続けていることが分かった。また、現在では NPO の努力によって状況が改善されつつあることや、児童労働があってもその後に教育を受けて、憲法制会議の議員にもなった女性がいることを知った。

さらに１学期は、「ホットシート」と呼ばれる演劇的手法を取り入れた。生徒が「Suma」「Suma の母親」「ソーシャルワーカー」の役になりきり、クラスメイトからの質問に答えた。生徒はこの体験を通して、Suma が置かれていた状況や、Suma の想いについての理解を深めた。活動後には、グループポエムを作成した。以下は、生徒の作品の一部である。

Four Color Feelings

Black　Like a black light,
everything I see was blue and gloom
Like a black sky,
my life was hollow.
Red　I want to spend time with my family,
but my family betrayed me.
Blue　My tears,
where I had cried many times,
I had regretted living the Kamlari life.
White　Light, hope and fight
Music was my light,
everything became bright and helped me fight.

Suma

6 years old, I was forced to work while my brother went to school and got education.
Working was always painful and I often hated my parents.
Why did they give birth to a daughter?
Why did they give birth to a daughter?
My master's child went to school.
My brother went to school.
Only singing my song saved me.
Luckily a social worker found me and released me from Kamlari.
No one is my master now.
I am my own master now.

これらの作品は、Collaboration Center に投稿して、協働学習をしている他国のメンバーにも共有した。

２学期からは、アフガニスタンの少女 Amina のストーリーを授業に取り上げた。テーマ設定の理由は、８月末にアメリカ軍がアフガニスタンから撤退し、タリバン政権の支配が厳しくなる中で、女子がどのような環境に置かれているかを学ぶためであった。Amina のストーリーから、タリバンが女子の教育を禁じていることや、早期結婚の強要が今もなお実在することを知った。また日々の報道を追いながら、女子が学校に行けなくなる状況を目のあたりにした。そのため、多くは生徒は「アフガニスタンで起きていることを周りの人に伝えたい」という思いが強くなっていった。そこで、学んだことや伝えたいメッセージを表現したポスターを作成した。これらのポスターは校内の掲示板で紹介し、全校生徒に広めた。また Collaboration Center にもポスターを投稿して、他国のメンバーにも共有した。（しかし、２学期から Collaboration Center のプラットフォームが一新され、他国の生徒との協働学習が以前のようにできなくなった。）

２学期の後半は、難民キャンプで生活する少女 Nasro のストーリーを授業で取り上げた。テーマ設定の理由は、報道でベラルーシからポーランドに避難する難民について知ったからである。「Brave Girl」に登場する Nasro の姿を通して生徒は難民キャンプの状況や、そのような状況に

おいても教育を受けることの大切さを学ぶことが出来た。

《 生徒が作成したポスター 》

昨年度からは、本プロジェクトの最終段階として、生徒が動画を作成している。生徒は授業を通して学んだことを振り返り、自分たちができることや伝えたいメッセージを模索して、動画に表現した。今年度は、Girl Rising の映像に出てくる少女達が住んでいる「カンボジア」「ネパール」「アフガニスタン」および「難民キャンプ」を切り口として、それぞれ約 4 分の動画を作成した。

《生徒が作成した動画のワンシーン》

これらの動画は、本校の英語・外国語スピーチコンテストで紹介し、「高校 3 年生からの大切なメッセージ」として全校生徒に伝えることが出来た。また、アフガニスタンのポスターと同様に Collaboration Center に投稿し、協働学習をしている他国のメンバーにも共有した。

さらに 3 学期には、Girl Rising プロジェクトに参加したイランの教員と連絡を取り合い、本校の生徒とイランの高校生が Zoom で意見交換する機会を持つことが出来た。このオンライン会議には、本プロジェクトのファシリテーターである Ed Gragert 氏と Girl Rising のプロデューサーである Kayce Jennings 氏も参加した。両国の生徒は、Girl Rising のストーリーを通して学んだことについて振り返った。そして、人権を尊重し、質の高い教育を受ける環境を整えることがいかに大切であるかなどを改めて確認することが出来た。また両国の生徒は、それぞれの国が抱えている女性の差別問題についても話をした。イランの生徒は、イランは女性への差別が他国と比べて多いと思われる等、偏見をもたれがちなことを危惧しつつ、女性一人ひとりが人権を得るために戦うことが大切だと強く主張した。また、この問題を解決するには、自分たちが出来ることからアクションを起こす必要があるとも述べていた。

さらに、Ed Gragert 氏や Kayce Jennings 氏は、今回の話し合いについて「国境の壁を越えてお互いの声を聞き合うことが大切であり、意味のある交流ができている」と振り返った。

５　成果と課題

〇成果

Girl Rising のムーブメントは、プロジェクトに参加する生徒が、力強い地球市民として活躍するために、共に学び合い、励まし合う仲間を生み出すきっかけとなっている。各国の生徒は同年代で同じ地球に生きる者として、SDG s 「持続可能な開発目標」の『質の高い教育』と『ジェンダー平等の実現』に対して積極的に関わっていく意識を共に強く持つことが出来た。

〇課題

他国の生徒との協働学習を充実させるためには、相手校とのスケジュール調整が必要となる。また、生徒同士の学びを深めるためには、フォーラム上で自分の感想を発信するだけでなく、他の生徒の意見を批判的に思考し、課題の再考や、新たな解決策の提案などが必要となる。そのために教員は、日々の授業でこれらの力を生徒が養うことができるように授業を工夫して設計することが求められる。また昨年 iEARN Collaboration Center のプラットフォームに変更があり、未だに多くの教員が使い方が理解できずに、協働学習を進めることが出来ない現状がある。この課題については、早急に対応して、生徒の学びを止めない工夫をしていく必要がある。

Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace に参加して

アメリカ合衆国・アルゼンチン・日本の学校との交流

山口県立高森高等学校　赤松敦子

2021年度に山口県立高森高等学校の英語表現の授業で、様々な国際交流活動を実施しました。そのうちの一つ、Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace に参加して、生徒がどのような活動をし、平和をテーマとした国際交流活動からどのようなことを学んだのかを紹介します。英語が得意ではない生徒が多かったのですが、様々な国の生徒から返事をもらい、英語を通して様々な国の生徒と意見を交換し、英語の成績も上がり、交流が楽しかったと言う生徒が多くいました。

国際交流　平和教育　多様性　自己表現活動　調べ学習

1. はじめに

外国の学校との交流に長年取り組んできましたが、ただ普通の文通のように生徒同士の興味のあることについての手紙のやり取りでは、話題が尽きてしまい交流が続きにくいということがありました。iEARN のプロジェクトのように、テーマを決めて、それを中心にして調べ学習や創作活動などを組み合わせて感想を送り合うなどの活動をする方が、生徒が一緒にいろいろなことを学べますし、今後の行動の指針が見つかる生徒もいますのでより深い学びになるのではないかと思います。授業時間の多くを割かなくても、導入部分を授業で一緒に取り組み、後は家庭学習で作品を仕上げるようにしました。

２．目的と方法

2-1 目的

今回、この Machinto - Hiroshima/Nagasaki for Peace のプロジェクトに参加させていただきましたのも、平和をテーマとして国際交流をすることで生徒の視野が広がり、平和に対する意識が深まり、英語を交流の道具として意識する機会を提供するというはっきりした目的があったからでした。

2-2 方法

1）実施計画案

主に１年生の英語表現で実施しました。活動時間は、授業の始めに次の課題内容や、外国から届いた返事の短い紹介をする時間、単元の合間の時間、考査の後で長期休暇に入る前の時間を全部で３時間ぐらい使いましたが、実際の活動はほぼ家庭学習でした。

2) 内容項目

アルゼンチンの Ms. Martha Ramona Soria (Escuela Secundaria Provincia de Tucman)とアメリカ合衆国の Ms. Karen Clarke (Wilmington High School in Ohio)と交流を始めました。

交換した作品：

1. 自己紹介

2. 学校紹介　（アルゼンチンからは手紙、アメリカ合衆国からはビデオとスライド）

3. 文化紹介（アメリカ合衆国からはスライド）

4. 「世界のヒバクシャ」についての調べ学習のスライド（こちらの生徒が作ったスライドに対する感想がアメリカ合衆国からは送られてきました。また、このプロジェクトのサイトの Hibakusha All over the World のフォルダにこのスライド（この活動には 1 年から 3 年まで全学年の 2・3 組で参加しました）を掲載していただいたことで、仙台市立上杉山中学校の若生深雪先生が生徒の皆さんにスライドを紹介してくださり、感想を英語で送ってくださいました。）

5. 平和をテーマとした詩か短い童話（アルゼンチンからは絵も届きました。アメリカ合衆国からは生徒の感想を一つの WORD 文書にまとめたものが届きました。上杉山中学校の生徒さんの感想も送っていただきました。）

3) 評価方法

成績に入れるための評価は、主題に合った内容を指定された語数以上書いているかということ、添削された原稿をきちんと手書きで清書しているかということで実施しました。すべての提出物（ノートや教科書の内容のプリントも含む）の合計を 20 点に換算し、それを考査素点の 8 割に加えました。

教科書：CROWN English Expression I

３．活動内容

3-1　具体的な実施内容

1. 自己紹介　（こちらからは手紙を送りました。）

2. 学校紹介　（WORD に書いた説明文とビデオを送りました。）

3. 文化紹介　（Power Point のスライドを送りました。Google Classroom のストリームに各自が選んだ紹介したい日本文化の話題を投稿させて、話題が重ならないようにしてから、関連資

料を調べて写真をつけて説明をスライドにまとめさせました。）
4. 「世界のヒバクシャ」についての調べ学習のスライド（様々な世界中の被曝者の被害に関する説明と証言を読んで、自分の感想を含めてスライドにまとめる課題を出しました。これもストリームに話題を書きこんで、話題が重複しないようにしました。主な資料として「世界のヒバクシャ」という Hiroshima Peace Media Center の連載記事などを紹介しました。https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?post_type=exposure）
5. 平和をテーマとした詩か短い童話（『まちんと』の童話を紹介して、このような短い童話でも戦争の悲惨さを伝えることができるということを説明し、地元の岩国空襲の証言を集めたサイト「岩国原爆と戦争展」、広島の中国新聞が発行している『学ぼうヒロシマ』という原爆の被害の実態や被爆証言を掲載した平和教育特集号等を読むか、または親族で戦争に関する記憶がある人に直接話を聞いて詩か童話を書くよう指示しました。単なる説明文よりも、詩や童話として創作することで、当事者の気持ちがより強く伝えられることがあるという話をしました。インドの学校から以前送られてきた、平和をテーマとした詩も参考作品としていくつか紹介しました。読む人がイメージを描きやすいように、内容と関連する絵や写真をつけるように勧めました。）
6. 感想を送ってもらったことに対するお礼（届いた感想は Google Classroom に課題ページを作ってアップロードし、感想をそのページに提出するよう指導しました。

3-2　具体的な実施内容（1）Wilmington HS

本校の生徒の平和についての詩を読んで Wilmington High School の生徒が書いた感想：

"I chose your poem ¨War, Life, and Peace¨ because it shows the seriousness of life, peace, and war and describes how something as easy as peace can be a lot harder to show and do than war and fighting which is unbelievable. As I studied your poem I was surprised when you stated, ¨Maintaining peace is much harder than waging war¨, because in life you would think that fighting a war or battle would be so much more challenging than keeping the peace when in reality because we don't step up to peace and pursue it war grows. Your poem sent out the message that life matters and everyone has their own life to live and they need to live and be respected no matter what they believe, who they are, or even what their interests are. This poem made me feel not only interested but understanding. It gave me the perspective that peace needs to keep growing no matter what and people should be able to live the life they want and others should approve of that. Thank you for writing this far-reaching poem."

"I selected your story "Iwakuni Air Raid" because it really touched me in a way that no one could understand. It was about life and how important it is to prevent loss of life. There have been too many innocent victims. Life is the most important thing, even when countries in conflict don't think it is. They need to hear our voices. "

"Thank you for sharing your great work. I hope you are well. I picked your poem "Black Shadow" because it was more my style. The darker side of how things felt interested me.

It seemed like it came from someone who was there the day of, which makes it so much more eye catching. The poem is different from others. I like the first person's perspective it has. We must never forget how those people must have felt that day.

I feel empathy through your poem. Seeing from different perspectives is an important thing. Thank you for sharing your creativity with us. "

3-3　具体的な実施内容（2）高森高校

年度末に生徒が書いた感想で多かった内容は、
1. 自分で調べてまとめたり、創作したりした文章をコンピュータで下書きを書き、手書きで清書することは英語学習に効果があった。
2. 世界中に多くの被曝者がいることを学んだ。
3. 自分で考えて創作・表現することに喜びを感じた。
4. 国がすべきことについて考えた。
5. 多様性について学び、固定観念に気づいた。
6. 視野が広がった。
7. 楽しかった。「自分が書いた手紙が違う国の人のところに届いていて読んでもらってお返事が来ているっていう実感がわいてすごいなと思った。交流するのが初めてだったので楽しかったです。世界にはいろんな人がいるんだなと思いました。」「私たちにできることは小さなことかもしれないけれど、「知る」ということもとても大切なことだと思いながら交流を楽しんでいました。」「新しいことをたくさん知れました。自分でこういう機会を持つことは難しいのでとてもいい経験になったと思いました。すごく楽しかったです。」

４成果と課題

○成果　生徒の感想に成果が表れていました。考査平均点も学年末には約 20 点上がりました。
○課題　相手校との予定調整をもっとするべきでした。生徒作品を交換する時、一つのファイルにまとめて送る方が共有が楽だったようです。

大学実践編
（含 Youth Project）

2021 年度 FOLK COSTUMES AROUND THE GLOBE PROJECT

—折り紙ワークショップから学ぶ JEARN Youth Project—

青山学院大学　　勝又恵理子

Folk Costumes Around the Globe プロジェクトに青山学院大学国際政治経済学部の学生たちが参加し、日本の民族衣装について資料と動画を英語で作成し、伝統衣装を守ることについて若い世代が学ぶ重要性や意義について海外の生徒と一緒に考えてもらうことを目的とした。フォーラムを使った非同期型交流の他に、オンラインワークショップを通して同期型交流を行い、互いの民族衣装や課題についてコミュニケーションを通して学ぶことができた。

異文化コミュニケーション　国際協働学習　ファシリテーション　民族衣装　ワークショップ

1. はじめに

2020 年から Folk Costumes Around the Globe プロジェクトの活動に参加し、2 年目を迎えた。この 1 年間は、2020 年度の活動に加え、さらに新しい活動を二つ行った。一つ目は、本校主催のイベント、「Aoyama Gakuin Global Week」に参加し、本プロジェクトと iEARN の活動について紹介した。二つ目は、2 日間のワークショップ、「Origami Workshop」を開催し、本学生がユースファシリテーターを務めた。

2. 目的と方法

2-1　目的

本プロジェクトは学生たちがユースファシリテーターとなり、自分たちの民族衣装や伝統を英語で披露する機会を与え、伝統文化を広めることを目的とした。学生たちは民族衣装の写真と説明を提供し、人々がそれをいつ着用するのか、どのように使用していたかを説明した。また自文化の民族衣装や伝統を英語で紹介した短いビデオを作成し、プロジェクトのフォーラムに発信して交流を図った。

2021 年 9 月は、本校が主催するイベント「Aoyama Gakuin Global Week」に参加し、iEARN と自分たちの活動についてのビデオを作成し、学内外に発信した。

2021 年 12 月と 2022 年 1 月は、学生たちがファシリテーターとなり海外の生徒を対象にした、折り紙で着物を折る 2 日間のワークショップ、「Origami Workshop」を開催した。海外の生徒たちが折り紙で着物を折ることを通して、日本の伝統文化について楽しみながら学んでもらうことを目的とした。

2-2　方法

2021 年 6 月から定期的に、筆者とオンライン会議を 30 分～1 時間行った。その他に学生たちだけで活動を対面とオンラインで行った。

3. 活動内容

3-1　全体活動の内容

【2021 年】

6 月　新メンバー参加、活動内容の策定
7 月　ワークショップの準備と資料作成
8 月　Aoyama Gakuin Global Week イベントの動画作成
9 月　Aoyama Gakuin Global Week イベントに参加
10 月　ワークショップの準備と資料作成
11 月　ワークショップの事前アンケート調査と配布資料の作成
12 月　インドの中学生を対象にワークショップを開催＆事後アンケート調査

【2022 年】

1 月　ルーマニアの高校生を対象にワークショップを開催＆事後アンケート調査、全体会議で各プロジェクト進歩状況報告と新体制発表
2 月　ワークショップのディブリーフィング
3 月　ワークショップの準備と資料作成

3-2　Aoyama Gakuin Global Week

「Aoyama Gakuin Global Week」は、2021 年 9 月 23 日から 10 月 2 日のまで、本校の国際精神を表している SDGs 関連の活動、教育、研究の取組みを推進し、可視化するイベントである。

2021 年 9 月 23 日（木）に「伝統衣装から SDGs を考える Understanding SDGs by Looking at Folk Costumes Around the Globe」というタイトルで、本プロジェクトの活動を紹介した。

https://www.aoyamagakuin.jp/aggw/calender/2021/agu_07

学生たちは、以下の「Folk Costume Around the Globe 紹介動画」を作成し、学内外の人が視聴できるようにした。

https://youtu.be/l002COOdC60
　このイベントでは、学生たちが日本の伝統衣装について学び、英語で動画と資料を作成し、ルーマニアの高校生にワークショップを開催し、交流を広める活動を行ってきたことを紹介した。その他に、iEARN の説明と今後の活動についても触れ、動画を通して本校の学生に活動を知ってもらい、興味を持ってもらえる機会となった。

3-3　Origami Workshop
　学生たちは伝統衣装について、国外の生徒たちが話し合えるワークショップを開催した。ワークショップの準備として、アイスブレークのアクティビティーを考え、英語の資料や動画を作成し、参加者に事前アンケート調査を行った。このアンケートの目的は、相手校の生徒の知りたいこと、学びたいことを調査し、それを基にクイズを作り、ワークショップを楽しんでもらえる工夫をした。

3-3-1　インドの中学生とのオンライン交流
　2021 年 12 月 14 日と 21 日に、インドの Geeta Rajan 先生と Parminder Kaur 先生の中学生たち（St. Mark's Senior Secondary Public School Meera Bagh Paschim Vihar）とズームで「Origami　Workshop」を行った。
　一回目は、自己紹介をした後に、事前に視聴してもらった日本の伝統衣装についての動画からクイズを出した。そして、一回目のワークショップ前に行った、日本文化と伝統衣装についての事前アンケート調査を基にクイズを出題した。ワークショップの最後は、生徒たちからの質問に答えた。
　二回目は、折り紙で着物を折る体験をしてもらった。そして、ワークショップの最後に質疑応答の時間を設けた。

3-3-2　ルーマニアの高校生とのオンライン交流
　2022 年 1 月 11 日と 18 日は、本プロジェクトの Group Facilitator であるルーマニアの Cornelia Platon 先生の高校生たち（Alexandru Papiu Ilarian Hish School）とズームで「Origami Workshop」を行った。ワークショップの内容は、インドの中学生と同じである。ルーマニアの高校生とは昨年度もオンラインで交流したが、今回参加してくれたのは違う学年の生徒たちであった。

写真１　「Origami Workshop」の様子：インドの中学生

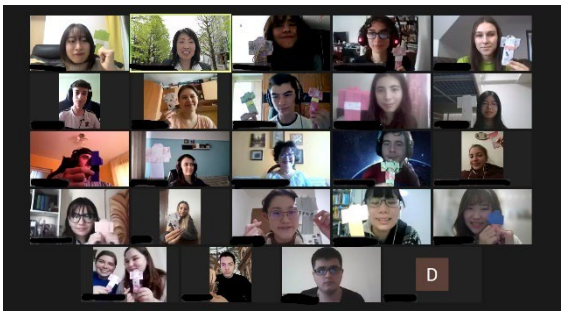


写真２　「Origami Workshop」の様子：ルーマニアの高校生

４成果と課題

成果
　ワークショップを通して、学生たちの主体性が高まり、積極的に取り組む姿勢が見られた。そして、国外の生徒たちと交流することによって文化的・言語的能力を高め、自文化を認識することにより自分のアイデアや考えを他と共有する機会を得た。また、英語の教材やビデオを自分たちで作成することでデジタルスキルを向上させた。それと同時に自分たちも知らなかった自文化を学ぶことができた。
　英語圏以外の国の生徒と英語を使ってコミュニケーションを取ることによって、異文化コミュニケーションへの動機づけになった。また、ルーマニアの高校生とインドの中学生と交流することで、互いの文化や課題を学ぶことができた。

課題
　今後はさらに多くの生徒にワークショップを開催したい。そして、大学生がファシリテーターとなり、日本と海外の小中高校生の国際協働学習を通して、ファシリテーション・スキルとグローバルリーダシップの育成に力を入れたい。

Youth Facilitator 実践としての学び

-台湾・インド・エジプトと行った Mottainai Workshop を通して-

青山学院大学　　岡田　麻唯

青山学院大学国際政治経済学部の学生が、GOMI on Earth プロジェクトの一環として、もったいないワークショップを企画した。2020 年に活動をスタートしてから、プラスチックごみの現状と削減のアイデアをまとめたビデオを作成し、発信を行った。今回は、その活動の発展版として、新聞紙を再利用したエコボックスのアイデアを紹介するために、海外の３つの学校とワークショップを実施した。

キーワード　国際協働学習　もったいない　ワークショップ　ユースファシリテーター

1. はじめに

本学では、2020 年から、iEARN に参加し、GOMI on Earth プロジェクトにて、ユースファシリテーターとしての活動を行ってきた。初めてのプロジェクトでは、プラスチックごみ問題の現状と日常的に取り組める解決案について、ビデオを作成し、コラボレーションセンターを通して発信を行った。多くの人に、ビデオを見てもらい、コメントをもらうことによって、学生たちのモチベーションにも繋がり、オンラインでの交流を目指して、活動に取り組んだ。

本学生が、世界中の学校との交流を通して、ごみ問題に関する知識を深め、活動を継続するだけでなく、ユースファシリテーターとして、海外の学校同士を繋げ、協働学習の機会をサポートする機会を得られることは、非常に意義のあることと考える。

しかし、国際協働学習を促進する役割を達成するためには、GOMI 問題に興味を持ち、様々な取り組みを行なっている各学校とつながりを持つ必要がある。

今後、ビデオ発信をどのように発展させ、どのようにプロジェクトを進めていくべきか、学生が中心となり、話し合いを行った。その結果、今回は、新聞紙を使ったエコバック作りを紹介するワークショップを行うことを企画した。

２．目的と方法

2-1 目的

以下の 4 点を目的とする。

①ごみ問題に関心を持ち、学びを深める。
②交流国とのワークショップを通して、異文化理解を深め、ファシリテーターとしての経験を積む。
③異文化コミュニケーション力を高める。
④学生同士の交流を深め、チームで協力することを学ぶ。

2-2 方法

１）実施計画案

前回のプロジェクトチームに新しいメンバーも加わり、引き続き、週一回程度、定期的に話し合いを行った。

２）内容項目

ワークショップ名を、“Mottainai Workshop”とし、2 日間（各回 1 時間程度）のワークショップを考案した。日本の「もったいない」精神について知ってもらいたいとの願いから、そのままの日本語をワークショップ名にした。

内容は、プラスチックごみ問題を、私たちが身近な問題として捉え、日々の生活の中でできる解決策について、共に考えられるものとした。具体的には、前回作成した学生たちの取り組みをまとめたビデオを見てもらい、ごみ問題に関するクイズを実施した。その後、解決案事例の一つである新聞紙を使ったエコボックスを紹介し、本学生が説明しながら、実際にみんなでエコボックス作りにチャレンジした。

３．活動内容

3-1　具体的な実施内容（スケジュール）

2021 年

3 月	ビデオ作成・完成 フォーラムへ自己紹介とビデオ発信 青学 iEARN チーム内での発表
4 月	青学 iEARN 新メンバー募集 ワークショップ企画
5 月	ワークショップ参加者募集開始
6 月	ワークショップ予行練習 コラボレーションセンターにて自己紹介交流
8 月	台湾とのワークショップ実施

9月　インド・エジプトとのワークショップ実施
　　青学内イベント（Global week）にて発表
10月　iEARN international 報告会にて発表

3-2　台湾とのワークショップ

Jhengsing Junior High School の 7 年生、13 名の生徒と、2 日間 ZOOM にてワークショップを行った。1 日目は、お互いのことを知ることを目的に交流の時間を持った。３つのグループに分かれて、本学生がファシリテーターとなり、自己紹介を行った。また、全体でごみ問題について Kahoot を使ったクイズを実施し、楽しみながら学びを深めた。2 日目は、新聞紙を使ったエコボックス作りを行った。

写真１　台湾とのワークショップの様子

3-3　インドとのワークショップ

Jawahar Navodaya Vidyalaya School の 7 年生から 10 年生、40 名の生徒と交流した。スケジュールの関係で、1 日のみ、1 時間半のワークショップを実施した。人数が多かったこともあり、チャットを使って自己紹介やごみ問題のクイズを行った。インドの生徒たちは、このようなオンラインでの交流は初めてとのことだったが、新聞紙でのエコボックス作りも真剣に取り組んでくれた。

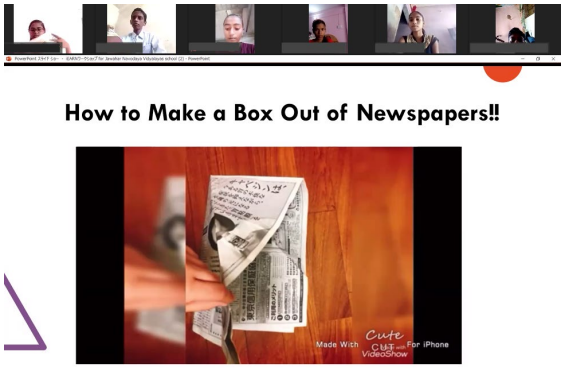


写真２　インドとのワークショップの様子

3-4　エジプトとのワークショップ

AlBashaer School の 6 年生から 8 年生、70 名の生徒と 2 日間のワークショップで交流した。1 日目は自己紹介とごみ問題のクイズ、2 日目は新聞紙のエコボックス作りを行った。人数が多かったこともあり、エコボックス作りでは、進み具合に差が出たが、最後までやり遂げたい生徒が多く、途中からは少人数グループに分けて、完成するまで一生懸命に取り組んでいた。

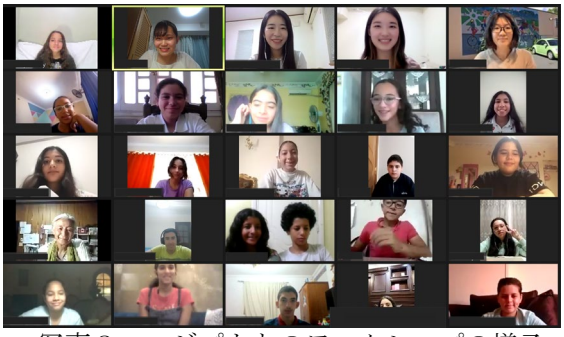


写真３　エジプトとのワークショップの様子

3-5　山口県高森高校との交流

高森高校の生徒たちと、コラボレーションセンターにて非同期型交流を行った。Mottainai Workshop で使用したビデオ動画やクイズの資料を、授業の中で取り組んでくださった。後日、生徒の皆さんの感想文も投稿された。

４成果と課題

〇成果

企画から実践に至るまで、すべて学生たちでプロジェクトを行う経験をしたことで、グループワークの方法やファシリテーションについて、大きな学びと自信につながっていた。また、台湾、インド、エジプトと、３カ国の学校との交流を通して、子供たちの様子やコミュニケーションの取り方に違いがあることに気づき、異文化理解を深めた。

３回とも、まったく同じような進め方や内容で、ワークショップを行うことができず、臨機応変に対応を変えなければならない場面に直面することが多かった。その経験からは、柔軟な対応力が養われた。

オンラインでの直接的な交流が実現できたことによって、今後の活動を計画する上で、さらに可能性が広がり、学生たちの学びの意欲が高まった。

〇課題

今回は、本校と海外校（１校ずつ）での交流であったため、今後は、２カ国、３カ国間の交流の手助けとして、ユースファシリテーターである本学生が活躍できるようにしていきたい。今回つながった交流国と引き続き交流を続けて、今後はみんなで GOMI 問題について考えられる場を作る。それぞれの国や地域の課題に、自分たちで主体的に取り組めるよう、現在新たなプロジェクト”Mottainai Contest”を計画しており、これから実施に向けて動き出すところである。

日米亜の iEARN Future Teachers Project KOSKO

iEARN のグローバル・コンピテンスの育みを目指して

明治学院大学　　長谷川早百合

日本の小学校教員を目指す学生たちが iEARN Future Teachers Project KOSKO に参加しアメリカとアルゼンチンの大学生たちと一緒に SDG4.5 を意識したグローバルなインクルーシブ教育について学ぶ機会を得た。学生たちはその過程で多くの壁を乗り越え最終成果物として Dream School of the Future を提唱した。iEARN がグローバル・コンピテンスと位置付ける 5 つの学習者成果が学生たちから読み取れた

SDG 4　インクルーシブ教育　グローバル・コンピテンス　国際協働学習・Global PBL

1. はじめに

小学校教員を目指す大学生の授業の一環として海外の大学生と 21 世紀に相応しい教育について考える iEARN Future Teachers KOSKO（以下、FT）プロジェクトに参加することとした。昨年度、初めて FT に参加し、今年度も同じグローバル教育に関わるコミュニケーション科学と障害を専門とする米国大学の先生と再度組むことができた。今回はさらに ICT を使った特別支援教育を教員養成課程で受け持つアルゼンチンの先生を迎え入れ、1 年目に開発したプロジェクト内容に新たな活動を加えた 3 カ国間の国際協働学習・Global PBL（Project-based Learning）に取り組んだ。その実践報告をしたい。

２．目的と方法

2-1 目的

iEARN の Project Framework（iEARN, 2020)には iEARN のプロジェクトに参加することによって達成しうるグローバル・コンピテンス(GC)として定義されている学習者成果項目（5 outcomes）がある（詳しくは本報告書、滝沢・長谷川参照）。小学校教員を目指す大学生が FT に参加しインクルーシブ教育についての国際協働学習を行う目的はこの GC を育むことであり、5 outcomes に沿って学生の振り返りと本課程後のアンケートを使った検証を試みた。

2-2 方法

1）実施計画案

実践英語コミュニケーション課程（90 分ｘ１５コマ。うち交流期間は１１コマ）。

２）内容項目

プロジェクトの最終目標は SDG4.5「全ての教育の不平等を無くす」に焦点を合わせたグローバルなインクルーシブ教育を取り入れた Dream School of the Future を考案し、相互に発表することである。表 1 に段階ごとの実施項目を示す。

表 1　Dream School プロジェクト段階
（下線は 2021 年度新たに加えた活動）

段階	実施項目（タスク）
Phase 1	自己紹介（バーチャル会議）
Phase 2	グローバルインタビュー（日米亜） ①グループ内 ②インクルーシブ教育専門家 16 名
Phase 3	特別支援教育ディスカッション ①特別支援教育と ICT（日米亜） ②自閉症スペクトラム障害（日米）
Phase 4	Dream School 成果物（日米のみ） ①共有（バーチャル会議） ②コメント・振り返り
Phase 5	最終振返り（日米のみ）

３）評価方法

毎週英語で書く振返りジャーナル、各プロジェクト段階の課題を形成的に評価した。

３．活動内容

3-1　Phase 1 自己紹介（日英亜）

“*I am from…*”の詩を全員準備しバーチャル会議で日米亜の国際協働学習がスタートした。

3-2　Phase 2 グローバルインタビュー

ここではアメリカ 39 名、アルゼンチン 20 名と日本 4 名を 16 の国際グループに分けた。各グループはメンバー同士の親睦を深める目的のグループ内インタビューと各グループに紹介されたインクルーシブ教育の専門家インタビューの 2 種類のインタビューを行った。その後まとめて iEARN・FT に掲載し他グループと共有した。学生たちはどちらの課題も時差・文化・言語などの壁を超えて達成する必要がありグループによっては苦戦していた。日本の学生はインスタなどを使った生の SNS 英語を通じて新たなコミュニケーションを体験した。インクルーシブ教育の専門家たちは、アジア、アフリカ、南北アメリカ、ヨーロッパをまたぐ 8 カ国 16 名の教育

者で構成され、日本からは NPO 法人 e-board の熊谷一亮氏にご協力頂いた。

写真１　第一回３ヶ国バーチャル会議（©Ledesma）

3-3 Phase 3 特別支援教育ディスカッション

既に小学校の英語教員であったアルゼンチンの大学生たちは卒業課題として特別支援教育を意識した ICT を使った英語の授業を作成し、日米学生たちがそれぞれの教育現場で導入する視点でコメントをした。一方、日米のみの活動では作家・東田直樹氏の「自閉症の僕が跳びはねる理由」をベースとした映画 *The Reason Why I Jump* を双方鑑賞し、事前に与えられた質問に答えたものを iEARN-FT に掲載し日米の意見交換を通じて自閉症と社会、教育への考えを深めた。

3-4 Phase 4 Dream School 成果物（日米のみ）

情報収集や意見交換など段階を経て最終成果物の制作に取り掛かかった。日本は 4 名１チームで自分たちの Dream School を第２回バーチャル会議で米国チームと共有した。後日 iEARN-FT プラットホームでも意見と振り返りを交換した。

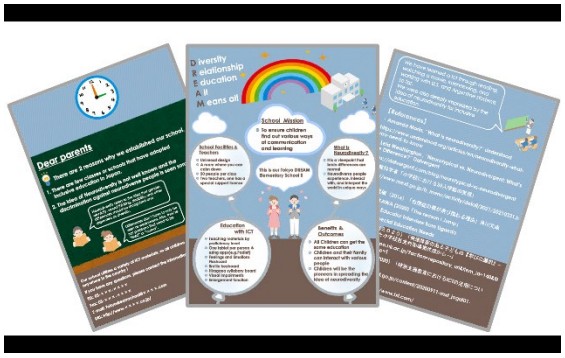


写真２　日本チームの Dream School パンフレット

４成果と課題

〇成果

iEARN の FT を通じてアメリカとアルゼンチンの専門の先生方との授業という大変貴重な国際協働学習の機会を学生たちに提供できた。iEARN の GC、学習者成果項目 5 outcomes（以下、鍵カッコ内）に沿った学生の振返りとアンケート解答より学生たちの GC の伸長がうかがえた。

1. 「グローバル・コミュニティとつながり、その一員となる。」

アメリカとアルゼンチンの学生たちと繋がることは大変貴重で楽しかったと記し、今後もグローバルコミュニケーションを楽しみ、学んだ内容をベースに英語や社会問題について学び続けたいと振り返っていた。教育に留まらず他の分野でも共有することによってお互いの良いところを学び合えば良い未来を構築できると期待を寄せ、グローバル・コミュニティーへの継続的関心を示していた。

2. 「多様な聴衆とつながるためのコミュニケーション能力を身につける。」

様々な手段を発見し工夫したようだが、言語、文化、環境が違ってもお互いのアイディアや考えを共有することができ、英語を使うとコミュニケーションが取れるのだと実感していた。「勇気を持ってわからないと伝えること」「諦めずにコミュニケーションを取り続けようとする姿勢を磨くこと。」またコミュニケーション能力とは言語を学ぶというより「お互いを尊重し合うことだ」と振り返る学生もいた。

3.「異文化や異なる視点を持つ人々への寛容さと尊敬の念を持つようになる。」

国によって違うインクルーシブ教育について良い点を自国で取入れることができ、別の視点の考え方の気付きから新たな考えがうまれ「違いは悪いのではなくむしろ良いことだ」「お互いの良い点から学び良い未来を構築できる」と視点の違いを肯定的に捉えていた。

4. 「地域や世界のコミュニティに有意義な貢献をする。」

将来教育に携わる時に海外と日本の教育双方の良さを伝えたいことや、小学校現場で「ニューロダイバーシティー」（脳・神経の多様性の尊重）の考えを認知させ実践したいとしていた。

5. 「互いを思いやり、地球を大切にする文化を持つようになる。」

SDG4.5 の枠組みでインクルーシブ教育について国際的視点を取入れ考えを深めてきた学生たちの振り返りには人の思いやりや協力への感謝が述べられていた。また、どのような特性を持っている子供でも教育現場で工夫を凝らせばニーズに対応できると感じたことも述べていた。

〇課題

・日本の学生を国際グループに入れる場合の言語戦略を含めた事前準備の工夫。
・GC の育みを目指す教員として必要な知識、スキル、資質を改めて考え備えること。

参考文献

iEARN.(2020). Project Framework.
https://docs.google.com/document/d/1CaihzNs4S2v8cNZSQnFBawObDkyWPNOhOplQ7elOB54/edit

大学におけるテディベアプロジェクト支援

～ユースプロジェクトとしての学生の参加形態の工夫～

金沢星稜大学　清水和久

テディベアプロジェクト（TBP）を進めるうえで、初めての先生でも参加しやすいように、JEARN Youth Project の学生がかかわる支援方法を考え実施した。具体的には、小学校において導入時期の興味関心を高める体験型のワークショップの実施、外国の教員と日本の教員の交流ツールとして LINE グループの活用支援、外国の紹介および日本の紹介コンテンツの作成支援などである。これらは、大学の学生側と現場教員側の双方にとってメリットがあることが分かった。

1. はじめに

筆者は小学校教員養成系の大学に在籍し、小学校教員を目指す学生に対して、国際協働学習の有益性を伝えたいと願っている。そこで、大学の学生と国際協働学習に参加する先生方とをつなぐ研究会を定期的に開催し、学生がプロジェクトの進行を把握し、必要な支援を行うこととした。

２．目的と方法

2-1 目的

小中学校の国際協働学習にかかわり、支援する取り組みを通して、学生がかかわる有効な支援方法を明らかにする。

2-2 方法

1） 研究会の参加体制と日程の決定

表１　１年間の活動日程の作成

月	小学校児童の意識	教師の動き	研究会
4 月	学習の見通しを持つ	国際協働学習の動機づけ	
5 月	交流相手の台湾について知る		第 1 回目 顔合わせ
6 月	100 人村ワーク体験で交流の意義を知る	交流校と LINE グループの作成	発信情報の蓄積方法の共有
7 月	発信内容の調査	地域情報の蓄積	
9 月	ペアの性格付けをして送付準備	台湾の交流児童との組み合わせ決定	第 2 回目：送り方見通し
10 月	台湾からペアの到着	ペアとの活動の話し合い	第 3 回目：ペアの活用法
11 月	TV 会議①自己紹介	TV 会議練習　大学生を練習相手に	第 4 回目：課題と解決方法
12 月	X'マスカード交換	英語でカード作成	第 5 回目 SDGｓのテーマ
1 月	TV 会議②発表会	SDGｓ関係の内容について	
2 月	ペアの返却と帰国	振り返り	第 6 回目：振り返り

交流相手は台湾の小学校 5 校 16 クラス、日本側は石川県内の小学校 5 校と中学校 1 校。年間 6 回の研究会を開催する。1 回目だけは対面で実施。その後 1 か月に 1 度の頻度で研究会（zoom）を開き、活動の進捗状況や、課題などについて相談をおこないながら進める。

2） 大学生が支援できる内容の検討と実施
ワークショップ、LINE での支援等

３．活動内容

大学生が行った支援内容

① 国際協働学習の導入ワークショップの授業
② 日本の教員との国際協働学習研究会へ参加
③ 台湾の担当校とのＬＩＮＥグループでの支援
④ TV 会議の練習相手、および本番の支援
⑤ 相手校への荷物の送付代行
⑥ TBP マニュアルの作成

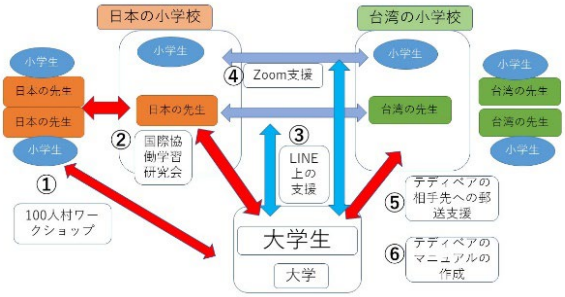


図１　大学生のかかわりの構図

3－1　国際協働学習導入ワークショップ授業

海外とテディベアプロジェクトを行う前に、世界のことを知り、日本と世界がつながっていることの認識を持ってもらうために、100 人村ワークショップを実施した。

3－2　国際協働学習研究会

全 6 回実施。表 1 の②内容で、大学生と現場の先生の合同の研究会を実施。2 回目以降は zoom で開催し、先生同士が今後の進め方や国際協働学習における課題点などを相談し、学生は交流の進捗具合を確認することができた。

3－3　LINE グループの作成

台湾は日本のように日常の連絡手段として LINE が普及しており、日常的に日本と台湾の教

員同士でやり取りする上で非常に便利である。学生は、交流クラスごとに LINE グループを作成。台湾の教師（クラス担任、総合の担当者、学校コーディネータ）、日本の教師（クラス担任）、大学（担当学生、筆者）で LINE の 1 グループを構成、全部で 16 の LINE グループを作成した。

3－4　TV 会議の練習

日本の小学生が台湾と TV 会議をするのであるが、zoom での会話は、日本語で行う場合でも難しい部分である。相手にとってわかりやすい表現などはやってみないとわからない。それで練習相手として大学生に対して自己紹介を行ってもらった。

TV 会議の練習相手となったのは 4 回であった。その他、本番の TV 会議には筆者も含めて zoom のホストとして参加、他の教員への参考資料として録画した。また TV 会議終了後気が付いたことを学生が学級担任へ伝えた。練習の時に、学級担任は先に TV 会議上での会話の注意点を伝えるのではなく、体験してみてから考えさせる方が有効であった。隣のクラスの児童と練習するのが一番簡単であるが、大学生が台湾の小学生の役割を演じることで、子供同士では気が付かないアドバスができる。例えば、大学生側は、台湾のこども役になって日本の事を聞いたり、台湾ことを紹介したりした。練習相手になってみると、みんな同じことを質問していたり、日本のことばかり話していたりして、台湾の情報の下調べが足りないことが分かった。

〇TV 会議練習時の実際のアドバイス

良かった点として「笑顔が素敵でした！マスクをしている分表情が伝わりにくいですが、笑顔を意識できていてとても良かった！」「終わる時に、That's all.があるととてもわかりやすかった。」などが伝えられた。

改善点としては、「ジェスチャーがもっとあると伝わりやすい。(ex.ギターの仕草や、テニスのポーズ)」「最後ン言葉として、Thank you!や、See you again!などあると好印象」「自分が話す側のときに、反応してくれた相手にもまた反応を返せるといいですね！無反応だと相手も寂しいと思います。(good!、nice!、I see など)」「相手からの質問や反応でわからないものがきても、後ろや横を見ずに前を見る意識をしたらよい。そのときはパニックになってしまうこともあると思うので、わからなかった場合の決まり文句みたいなものを決めておくといい！(ex.ワンスモアプリーズ等)

進行上の問題として「移動時間の短縮が必要で、次のペアはすぐ隣で待機しておいたら時間に少しでも余裕がでるはず」「次の児童に話す場面を譲るときは、“See you”、“That’s all”の後に Next などの声掛けがあるとスムーズに交代出来ると思う」などがあった

3－5　荷物の郵送

EMS をつかった郵送は、書き方がわかりにくく、内容物の重さも 1 つずつ図る必要があり、煩雑である。EMS のあて先は現在はネット上から入力する方法に変更されているので、大学の学生の方で代行して打ち込み送付した。

3－6　マニュアルの作成

今回参加が初めての教員からは、具体的な年間を通しての見通しが持ちにくいと言われたため、学生がマニュアルを作成した。内容は以下の通りである。

・TBP の説明
・学習活動の流れ
・台湾の教育体制や各小学校の情報
・TV 会議の方法、留意点
・大学生のサポート内容

このマニュアルは次年度以降の TBP 参加者にも有益な資料となるはずである。現場教員にとっても大学生とは相談しやすいので、大学側が柔軟な対応ができる点にある。

4. 成果と課題

〇成果（教員の振り返りより）

・ペアを通して、他者意識が高まり、人を喜ばせたいと思うように育ってきたこと。
・Card のやり取りだけではなく、TV 会議をやってみたことによって海外の文化を知ろうとする意欲が高まった。国の文化の違いから、人と人との違いを大切にそこから学ぶ姿勢ができた。
・同じ学年の人たちとの交流発表会はあるが、外国との交流になると、相手が今までと違うこと(言語、コミュニケーション、ジェスチャー、文化の違い)など考えることがたくさんあったので、視野が広がった
・英語を喋りたいという意欲が向上し、外国や多文化の存在を意識することができた
・世界という広い視野で考えたり、SDGs についての意識が高まったりしたこと。
・ペア達をいろいろなところに連れて行って、日本の様子を伝えようとしている。

〇課題

・カリキュラムに位置づいている学校は、動きやすいが、投げ込みで行った学校は時数確保が難しい。
・1 人 1 台のタブレットを交流で生かす方法

国際協働学習 iEARN レポート
2022 年 6 月 1 日発行
出版元 NPO 法人 JEARN
https://jearn.jp/iearn-report/index.html
ISSN 2434-0049